大阪大学大学院人間科学研究科
附属 未来共創センター

# 年次報告書 2022
Annual Report 2022

# 未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年４月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。さらに、2017年度からは OOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社学連携活動も開始し、2022年度には22を超える協定が生まれました。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOS による連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。OOS が創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

## 多様な活動を通して社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

**◇人間科学セミナー／出張授業**

大学内で、または大学の外で、人間科学の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

**◇「シリーズ人間科学」の発刊**

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、人科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」「越える・超える」「争う」「住む・棲む」の８冊が発刊されています。

**◇ジャーナル『未来共創』の発刊**

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年1回発刊します。

**◇研究会の運営**

大学外からも参加可能な「共創知研究会」を主催しています。また、テーマを定めた研究会も実施しており、2020年度は「レジリエンス」、2021年度は「教育と格差」2022年度は「人口減少への共創的アプローチ」をテーマに、多分野の教員・学生が議論を重ねました。この研究会からの成果は特集論文として、ジャーナル『未来共創』を通じて発信していきます。

## 大学らしい「共創の場」から共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターとともに新しい「知」をうみだします。

**◇ OOS 協定**

産官社学連携により、人間科学の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします

**◇オープン・プロジェクト**

学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るために設置されました。現在、13プロジェクトが展開され、さまざまな社会との結び目をつくり、あたらしい場をつくっています。

**◇「学生プロジェクト」**

学生の自由で、独創的な発想に基づく学際性のある社会との共創的なイベント、活動を支援しています。学系を超えた交流会の開催など、学生ならではのプロジェクトが展開されています。

# 目　次

はじめに ……1

I　未来共創センターの概要
1 設立の経緯と背景 ……2
2 活動目的と概要 ……3
3 運営体制 ……3

II　活動報告
1 センター主催のイベント
1.1　人間科学セミナー……4
1.2　学生企画によるプロジェクト……8

2 OOS
2.1　OOS 協定……15
2.2　OOS 関連イベント……15
2.3　OOS シンポジウム……17

3 オープン・プロジェクト
3.1　オープンプロジェクトの活動 ……22

4 研究事業
4.1　研究事業 ……36
4.2　ジャーナル『未来共創』の発刊 …37

5 教育事業
5.1　未来共創センター担当授業 ……38
5.2　シリーズ人間科学の発刊 ……39
5.3　『私の一冊』の発刊 ……40

6 その他の活動 ……41

III　未来共創センターの活動に関わった皆さんの声
センターの研究事業……42
OOS の活動 ……42
人科50周年記念学生プロジェクト ……43

# はじめに

2022 年度の附属未来共創センターの年次報告書が完成しました。

2022 年度はコロナ禍の影響がだいぶ減ってきた一年間でした。もちろん依然として直接間接の影響で亡くなった方は少なくありませんし、医療機関が逼迫した時期もありましたが、大学にかかわる活動はコロナ以前と近い形に戻ってきました。未来共創センターにかかわるオープンプロジェクト、OOS 協定、学生プロジェクトの活動も対面での活発な活動をふたたび行うことができるようになりました。13 のオープンプロジェクト、22 の OOS 協定、未来共創テーマ研究会、人間科学セミナーで活発な活動を展開してくださった皆様に深く感謝申し上げます。

附属未来共創センターは人間科学研究科において社学連携を推進することをミッションとしている組織になります。社会のさまざまなアクターと「ともに」活動する未来共創センターのありかたは、人間科学研究科が伝統的に担ってきた役割を可視化するものであり、かつ現代社会の要請にかなったものでもあります。2022 年度末に人間科学研究科は、OU マスタープラン実現加速事業重点推進プログラムに採択され、2023 年度からプロジェクト IMPACT として事業を開始する事になりましたが、IMPACT の理念の土台を作ったのは、未来共創センターによって数年に渡って展開してきた先生方、学生の皆さん、学外の協力団体の皆さんの活動であったと言っても良いのではないかと思います。言い換えると、未来共創センターの活動は、人間科学研究科そして大阪大学の今後にとって大きな意味を持っていると言えそうです。今後とも未来共創センターの活動にご参加いただき支えていただけましたら幸いです。

報告書制作に当たってくださった木村友美先生、川渕千恵子さん、そして未来共創センターの活動を支えてくださった OOS 協定、オープンプロジェクトを支えてくださった学内学外のみなさま、2022 年度までご活躍いただいた石塚裕子先生、2023 年度に新たに着任された杉本めぐみ先生に御礼申し上げます。

附属未来共創センター
センター長　村上　靖彦

# Ⅰ　組織の概要



## 1　未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和 47 年（1972 年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4 年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（ 4 学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と 2007 年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（ 1 学系、 ：グローバル人間学系）の 2 専攻 5 学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そこで、2016 年に本研究科では従来の 2 専攻 5 学系体制から、1 専攻 4 学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻のなかに、行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系の 4 学系としました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」が加わりました。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、2016 年の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO 等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」が設置されました。

2022 年には、人間科学部は創立 50 周年を迎えました。

大阪大学大学院人間科学研究科
附属 未来共創センター

## 2　活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、2017 年度からは OOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

## 3　運営体制（2022 年度）

**《未来共創センター構成員》**

**未来共創センター**

村 上　靖 彦 教授［センター長］（兼）
澤 村　信 英 教授［副センター長］（兼）
木 村　友 美 講師
石 塚　裕 子 講師
織 田　和 明 特任研究員
川 渕 千恵子 特任事務職員
篠 原　一 光 教授（兼）
稲 場　圭 信 教授（兼）
白 川　千 尋 教授（兼）
髙 田　一 宏 教授（兼）
石 蔵　文 信 招へい教員

**未来共生イノベーター博士課程プログラム部門**

榎 井　　縁 特任教授
MELLUER Stephen 特任講師（常勤）
徳 永 恵美香 特任講師（常勤）
王　　一 瓊 特任助教（常勤）
平 尾　一 朗 特任助教
佐々木 美 和 特任助教
鈴 木 ひでみ 特任事務職員（2022年10月～）
亀 岡　美 穂 特任事務職員（2022年 9 月まで）

# Ⅱ 活動報告

## 1 センター主催のイベント

### ◆1. 1 人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。今年度は、第53回から第58回までの6回のセミナーが開催されました。

| 日付 | 時間 | タイトル | 演者所属 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|
| 2022年<br>6月27日 | 17:00–<br>18:30 | 第53回 人間科学セミナー<br>PUBLISHING FROM THE PERIPHERY:<br>HOW REVIEWERS AND EDITORS DEAL WITH NON-US RESEARCH | NYU<br>Editor-in-chief,<br>Sociological Theory | 招へい教員<br>Iddo Tavory |
| 2022年<br>7月14日 | 14:00–<br>16:00 | 第54回 人間科学セミナー<br>・教育格差とネットワーク<br>・個体間コミュニケーションにかかわる認知能力<br>ーサルとラットの行動研究からー | 人間科学研究科 | 荒牧草平、勝 野吏子 |
| 2022年<br>10月13日 | 13:00–<br>15:00 | 第55回 人間科学セミナー<br>・災間の災害復興をかんがえる。<br>・健康と伝統的食習慣：カンボジアにおける淡水魚生食とふぐ食の実態 | 人間科学研究科 | 宮本 匠、太田貴大 |
| 2022年<br>10月25日 | 13:30–<br>15:00 | 第56回 人間科学セミナー<br>THE CRISIS OF CITIZENSHIP:<br>REIMAGINING A POLITICS AND A PEDAGOGY OF HOPE | University of Southeastern Norway/University of Leeds | 招へい教員<br>Prof. Audrey Osler |
| 2022年<br>11月10日 | 14:30–<br>16:30 | 第57回 人間科学セミナー<br>・統計的因果推論と交絡調整<br>・学習意欲に着目した教育のデザイン | 人間科学研究科 | 山本倫生、後藤崇志 |
| 2023年<br>3月9日 | 10:05–<br>11:05 | 第58回 人間科学セミナー<br>Mapping collaborative pathways for disaster recovery: a focus on women and children | ・Melbourne School of Population and Global Health (and the Centre for Disaster Management and Public Safety), University of Melbourne<br>・Head of Clinical Services, Phoenix Australia: Centre for Posttraumatic Mental Health | Prof. Lisa Gibbs,<br>Ms. Jane Nursey |

## 第 53 回　人間科学セミナー　2022 年 6 月 27 日

### PUBLISHING FROM THE PERIPHERY: HOW REVIEWERS AND EDITORS DEAL WITH NON-US RESEARCH

講演者 **Iddo Tavory** ／NYU Editor-in-chief, Sociological Theory

While there are many social worlds of sociology, publishing “internationally” in sociology has become synonymous with publishing in American journals. American sociological journals such as the American Journal of Sociology (AJS) and the American Sociology Review (ASR) garner disproportionate citations, visibility and prestige. In this landscape, researchers writing from outside the United States, and especially those writing about non-US sites, face considerable challenges if they want to take part in an international conversation. This talk attempts to tackle both the practical and the structural challenges of publication in such journals. First, based on my current editorial work and my past as board-member at AJS and other journals, I present an overview of the journal publication structure in the United States, and the kinds of challenges to publication that I have seen non-US authors struggling with; Second, I will outline a key structural dilemma of non-US research: the requirement to both prove that the work is relevant to US-research, while simultaneously asked to provide more “context” for imagined US-readers.

## 第 54 回　人間科学セミナー　2022 年 7 月 14 日

### 教育格差とネットワーク

講演者 **荒牧 草平 教授** ／教育社会学

**＜要旨＞**

1．教育機会の趨勢と、不平等の生成メカニズムを検討した、『学歴の階層差はなぜ生まれるか』。
2．子どもの学歴達成に対する親の教育期待が、子どもにとっての祖父母やオジオバ、および、親自身の友人や知人といったパーソナルネットワークの影響を受けて形成されることを指摘した『教育格差のかくれた背景』。
3．親のパーソナルネットワークが、子どもの学歴に対する期待だけでなく、育児不安、養育態度、子どもの将来への理想、親自身の生き方など、多方面にわたって関与することを指摘した『（仮題）子育て世代のパーソナルネットワーク』。
4．今後の研究計画（ネットワークと共生）。

### 個体間コミュニケーションにかかわる認知能力 —サルとラットの行動研究から—

講演者 **勝 野吏子 講師** ／比較行動学

**＜要旨＞**動物の音声、特にヒト以外の霊長類の音声はヒトの言語と結びつけて考えられやすい。しかし、コミュニケーションが成り立つ仕組みや発話の構造など、動物音声がそのままヒト言語の起源となったとは考えにくい。一方で、音声コミュニケーションを構成する認知能力に関しては、ヒト以外の霊長類、あるいは進化的にヒトと隔たった種においても共通点が見出せる。本セミナーでは、ヒト言語と動物の音声コミュニケーションに関する理論や、コミュニケーションがどのような認知能力で構成されているのかを紹介する。その後、講演者が行ってきたニホンザルの行動観察研究と、ラットを対象とした実験的研究について紹介する。

## 第 55 回　人間科学セミナー　2022 年 10 月 13 日

### 災間の災害復興をかんがえる

**講演者** **宮本 匠 准教授** ／共生行動論

**＜要旨＞**災害が、頻発化、激甚化、広域化する中、もはや私たちは「平時」と「非常時」を区別することができないような、常に災害の「間」（なか）にある社会に生きている。同時に、日本社会は、この「災間（さいかん）の時代」を、人口減少、高齢化、経済の停滞、衰退と、右肩下がりの状況で迎えざるを得ない。このように、右肩下がりで、既存の社会資源が目減りしていく中で、眼前の課題がどんどん大きなものに膨らんでいくときには、仮に何をすべきかが明らかであっても、一筋縄では問題が解決しないような、独特な態度を人々にもたらすのではないだろうか。このとき、私たちは、その問題をどのように解決すべきかという「問題解決」に関心を向けるだけではなく、その問題にむきあう主体がいかに存在しうるかという「主体形成」にも関心を払わなければならない。「災間の時代」かつ「右肩下がりの時代」というこの社会の未来を生き抜く術を災害復興を事例に考える。

### 健康と伝統的食習慣：カンボジアにおける淡水魚生食とふぐ食の実態

**講演者** **太田 貴大 准教授** ／コンフリクトと共生

**＜概要＞**食は健康の源であるが、食によって健康を損なうこともある。また、健康のために伝統的な食習慣の変容が必要であっても、それを実現することは容易ではない。東北タイ、ラオスやカンボジアのメコン川流域では、コイ科の淡水魚を生食する伝統的な食習慣がみられる。淡水魚生食は寄生虫感染につながるため、様々な対策が実施されてきたが、この食習慣を変えるには至っていない。前半では、カンボジアにおけるこの食習慣の実態を、食物新奇性恐怖尺度（Food Neophobia Scale）を指標にして明らかにする。また同地域では、有毒の淡水フグを食する習慣がみられ、健康被害が報告されている。淡水魚生食による寄生虫感染の健康影響に比べて、フグ毒の影響は短期間で現れる。後半では、同地域でのフグ食の実態と意識調査の結果を示す。最後に、調査結果を踏まえて、健康に生きることと伝統的食習慣を享受することとの間での「折り合いの付け方」について議論したい。

## 第 56 回　人間科学セミナー　2022 年 10 月 25 日

### THE CRISIS OF CITIZENSHIP: REIMAGINING A POLITICS AND A PEDAGOGY OF HOPE

**講演者** **Prof. Audrey Osler** ／University of Southeastern Norway / University of Leeds

Prof. Audrey Osler University of Southeastern Norway /University of Leeds
日本学術振興会外国人招へい研究者（JSPS BRIDGE fellow）
司会：北山夕華（大阪大学人間科学研究科）

In the face of economic difficulties, demographic change and uncertainties, some welcome authoritarian and populist leaders whose rhetoric suggests easy solutions to complex problems, blaming the most vulnerable (e.g. refugees, foreigners) for society's ills. A politics of solidarity and hope is derided as those who have suffered the negative impact of globalisation, economic crisis and austerity policies are urged to put "our people" first. At the same time, in the wake of the Covid-19 pandemic, and inspired by the global Black Lives Matter, MeToo, and climate justice movements, many young people are proving themselves to be active citizens, ready to fight for human rights. Prof. Osler will look afresh at what a pedagogy of hope might look like. And she will argue for a relational approach to human rights education, where teachers and students look critically at the past and explore the gap between human rights ideals and their own realities, and work together to develop new narratives, uncovering the knowledge that has been lost or made invisible in textbooks and state-led top-down curricula.

## 第 57 回　人間科学セミナー　2022 年 11 月 10 日

### 統計的因果推論と交絡調整

**講演者** **山本 倫生 准教授** ／行動統計科学

**＜要旨＞**ものごとの原因と結果の関係を探求することはあらゆる科学分野における大きな目的の 1 つである。このような科学領域は因果推論と呼ばれ、心理学、社会科学、医学などの諸分野で広く実践されている。統計学では1990年頃以降、因果推論の理論や手法が体系化され、現在も理論・応用の両面において研究が活発に行われている。本セミナーでは、まずは、統計的因果推論で用いられる主流なフレームワークとして、ネイマン-ルービン因果モデルと構造的因果モデルの 2 つを紹介し、各モデルに基づく因果効果の定義について解説する。また、因果効果の識別のためには交絡因子の調整が重要な役割をもつ。そこで、交絡の定義、および、交絡因子の同定方法について解説し、それに関連する講演者の研究について簡単に紹介する。

### 学習意欲に着目した教育のデザイン

**講演者** **後藤 崇志 講師** ／教育工学

**＜要旨＞**「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」とは、学習者の意欲を引き出すことができなければ指導が意味をなさないことを例えたイギリスのことわざである。教育者が「意図した通りに受講してもらえさえすれば、高い学習効果が期待できる」機会を整えたとしても、そこに学習者が意欲的に取り組まなければ十全に効果を発揮することはできない。本報告では、1) 学習の価値を見出してもらうことで、学習者の意欲を向上させる教育実践と、2) 学習機会に意欲の面での幅広い層の参加を促す教育実践について、その効果検証の結果とともに報告する。誰もが可能性を発揮し、成長できる教育機会をデザインする上で、学習者の意欲の構造・機能・実態を把握することの重要性について議論したい。

## 第 58 回　人間科学セミナー　2023 年 3 月 9 日

### Mapping collaborative pathways for disaster recovery: a focus on women and children

The widespread impacts of disasters are well known - but typically these impacts vary for different population groups. This presentation will highlight some of the unique challenges for adult females as well as children and young people. We will include findings from research conducted in Australia and from systematic reviews of the international literature about long term disaster mental health impacts. The clinical implications of these gender and age differences will be explored through the lens of treatment and management approaches trialled in the Australian context. Opportunities for collaborative partnerships in these domains will be identified.

**講演者** **Prof. Lisa Gibbs** ／ Melbourne School of Population and Global Health (and the Centre for Disaster Management and Public Safety), University of Melbourne

Lisa Gibbs leads a major disaster research program at the University of Melbourne, Australia which has influenced disaster recovery approaches internationally. Her work focuses on risk and protective factors for health and wellbeing following disaster exposure for individuals and affected communities. She is an expert contributor to many international collaborations including the Asia Pacific Disaster Mental Health Network.

**講演者** **Ms. Jane Nursey** ／ Head of Clinical Services, Phoenix Australia: Centre for Posttraumatic Mental Health

Jane Nursey is a registered Clinical Neuropsychologist with 30 years' experience in the field of posttraumatic mental health. Jane develops and implements specialist clinical treatment and training programs in trauma related mental health to support individuals, communities and organisations impacted by trauma.

## ◆1. 2　学生企画によるプロジェクト

学生主催の「学生プロジェクト」を通じて、新しいつながりを生み出しました。

| 日付 | タイトル | 企画者・話題提供者 |
|---|---|---|
| 2022 年<br>4 月 20 日 | シニアの方向けドローン操縦体験会 | 河野真結、小泉香奈、川井杏奈 |
| 2022 年<br>7 月 2 日 | さぽちむ：フリードリンクNo.2 | ふうか、近間仁美、藤田瑠久 |
| 2022 年<br>8 月 5 日 | 夏休みの宿題を終わらせたい会 | ふうか、近間仁美、藤田瑠久 |
| 2022 年<br>11 月 27 日 | 被爆伝承をきく | 井元遥花、柞原杏香<br>佐々木佐久子（話題提供） |
| 2023 年<br>2 月 22 日 | 卒業生による交流会<br>―フェミニズム・ジェンダー・セクシュアリティ | 都倉穂香他、人間科学部４年生有志 |

### シニアの方向けドローン操縦体験会

実施日時：2022 年 4 月 20 日（水）14:00-16:00
参加者数：大阪大学学生 3 名・シニアの方14名・
REDEE下山様
企 画 者：河野 真結、小泉 香奈（人間科学部 3 年）
川井 杏奈（法学部 3 年）

#### ○当日のタイムテーブル

14 時 00 分：集合・REDEE ミニシアターで開会
阪大生挨拶（目的と自己紹介）
下山様挨拶（館内案内について）
14 時 20 分：下山様による館内案内・高校生による e スポーツ大会見学
14 時 50 分：ドローン体験
15 時 30 分：座談会（質疑応答とディスカッション）
16 時 00 分：解散

#### ○本企画の目的

「シニアの方向け　ドローン操縦体験会」の目的は、
① シニアの方にドローン操縦を通じてデジタル機器への抵抗を減らしていただくこと
② 吹田市の地域コミュニティづくりに寄与すること
の大きく 2 点である。コロナ禍でよりコミュニティの希薄化に危機感を抱いたこと、2 年生の共生学系での実習で地域の交流の重要性に気付いたことが背景として挙げられる。また交流の材料にドローン操縦を選んだのは、いわゆるお年寄りの遊びとはかけ離れたものを通じて、新しいコミュニティづくりの在り方について探れるのではないかと考えたからである。

## ○内容

最初のプログラムである館内案内では、実際にｅスポーツやプログラミングを行うことができる部屋・施設を順々に案内していただいた。日頃からお孫さんとのゲームで慣れ親しんでいる方から、初めて見る方まで三者三様であったが、歩きながらの対話や質疑応答を通じて我々学生もアイスブレイクできた。その日偶然施設に訪れていた高校生によるｅスポーツ大会も少し観戦させていただき、ｅスポーツやプログラミングの面白さと人気を目の当たりにした。

次は小型ドローンの操縦/戦車を模したドローンでの対戦の二手に分かれて、メインイベントであるドローン操縦に移った。最初は操作に苦戦しながらも、徐々に互いに教えあって上達し、対戦のコーナーではその日はじめまして同士の方々で思いっきり熾烈な戦いを繰り広げており、想定していた以上の盛り上がりだった。

最後の座談会では「ドローン操縦を通じての交流にこれからも参加したいか」「これからのコミュニティ形成に求める事」などこちらからの質問に回答していただく形でディスカッションを行った。学びに貪欲で好奇心旺盛な方が非常に多く、地域の高齢者大学のようなものを通じて実際にプログラミングを学んでいる方からもお話を聞くことができ、これからの高齢者のコミュニティや交流には我々学生のような外部からの働きかけが重要になってくると実感した。

## ○プロジェクトの考察

結論としては、今回のドローン操縦を通じた交流はシニアの方同士の横の繋がりだけでなく、学生とシニアの方々といった縦の繋がりにも非常に有効であった。

館内を巡っている最中に終始メモを取り、写真を撮り、分からないことはその場ですぐに質問するといった参加者の方々の姿勢が印象的であった。知らない事や興味のある事への感想や、「孫がプログラミングのゲームをしているけれど、よく分からないから今日はこの企画に参加しに来たのよ」というように参加している理由が徐々に聞こえてきて、最初はドローンを通じて初対面の方同士でも本当に仲良くなれるのか不安があったが、シニアの方々同士だけでなく我々学生も早速参加者の皆さまとたくさんお話ができ、興味のある事を通じた交流の可能性を非常に感じた。

その後のドローン操縦体験では交代での操作や２人での対戦を通じて、対話というよりスポーツで仲を深めるような形で距離が縮まっていた。「これはおもしろいから市販のドローンを孫に買ってあげたいわ」「普段から（ドローンを）飛ばせるところはこのあたりに無いか」などドローンをこれからも日常的に行いたいという趣旨の声や質問があり、馴染みの遊びではなく真新しい体験を通じての交流はその場限りで終わらず、これから発展しうるものであると感じた。

座談会においては、まずｅスポーツやドローンの企画にこれからも参加したいかという質問に、「リハビリができる、体の状態や取り組みが数値化できればおもしろい」「避難訓練のシミュレーションにも有効化かも」「こういう施設は親子向けのイベントが多いがシニアと孫向けのイベントがあれば参加したい」などという意見が寄せられた。更に高齢者の新しいコミュニティ形成のきっかけにはどうようなものがあるかという質問には、高齢者大学のように興味のある事を学べる場が挙げられた。一方で「高齢者施設での遊びはあまりおもしろいものがなく、そこで過ごす時間に不安を抱えている」といった意見があった。「そのために今回のような企画は継続していくべきなのでは、頑張ってほしい」という声をいただいた。ドローン操縦会中にも実感したように、これからの高齢者のコミュニティや交流には我々学生のような外部からの働きかけが重要になってくると改めて感じた。今回の企画をこれで終わりにせず、次の企画・後輩に繋ぐなどして大切にしたい。

## さぽちむ：フリードリンクNo.2

実施日時：2022 年 7 月 2 日（土）10:00-16:00
参加人数運営側：主要メンバー 2 人、学生 19 人
参加者： 69 人
参加者の内訳：親子連れ 9 組（大人 15 人、子ども 21 人）、
大学生 8 人、留学生 7 人、大人 18 人
企 画 者：ふうか、近間 仁美、藤田 瑠久

### ○実施概要

patona グローバルビレッジ津雲台（以下、GV）の、「コミュニティラボ」にて、フリードリンクを通じて住民の方々の交流の促進を目的に実施した。

フリードリンクの種類の一つのコーヒーは、GV 内の「ハレとケ」のコーヒー豆を使用させていただき、「大阪大学コーヒー愛好会」にドリップ、ドリップ体験という形で協力していただいた。また、当日はドリンクの他に、塩サブレとスコーンも無料配布、同時に「さぽちむ（学生チーム）」のパンフレットも手渡した。

### ○当日の様子

10 時を少し過ぎたころから、親子連れ、GV の学生寮の学生、留学生、教職員家族などがポスティングしたパンフレットや、掲示していたポスターを見て来てくださった。13 時頃には、コミュニティラボ内が満席になるほどの盛況となった。用意した焼き菓子 50 個弱は 15 時過ぎには売り切れ、2L のペットボトル飲料 2 本も売り切れた。コーヒーも 800 グラムほぼすべてが売り切れ、ドリップ体験には 10 名ほどが参加していた。運営側の学生は、一人以上が各テーブルに付いてコミュニケーションを丁寧に行えていた。コミュニティラボ内の想像以上の盛況と、当日の猛暑もあり、当初の予定のようにクーラーボックスをもって外へ行くことは数時間のみのチャレンジとなった。しかし、「面白そうなことをしているから来ました。」と、事前告知が届いていなかったシェアハウスの方が来られた結果、同じフロアの方々に広報が行き、シェアハウスとの交流も生まれた。また、GV の一般住民と学生寮・教職員のご家族との交流も生まれ、「コミュニティラボ」や「みんなの保健室」についての取り組みにも興味を持ってくださった。

### ○プロジェクトの考察

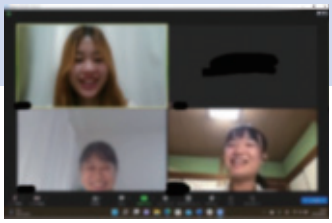
今回のイベントを実施する前の課題間として、同じグローバルビレッジ津雲台という場所にありながら、学生寮と住民側の建物との交流がないということが挙げられていた。今回のイベントの一番の成果は、学生側と住民側が集える場所として、「みんなの保健室」があると認識してもらえたことだと思う。実際に、イベント中に、「こんなところがあったって知りませんでした。」「ここは何をしてる場所ですか？」といったご質問を多くいただいたり、私たち「さぽちむ」の取り組みについて興味を持ってくださる方が大半を占めていた。

参加された理由には、ポスティングやポスターが功を奏し、「無料」でドリンクやお菓子をもらえるという部分がやはり多かった。きっかけ作りとしては、かなり有効だったのではないだろうか。さらに、目的であった住民同士の交流という観点から見ても、留学生と学生、親子連れ、カップルなど様々な属性の人々が、ドリップ体験などをきっかけにキッチンに集まり、コミュニケーションが図られていた。運営側の学生からも、様々な人と話せて楽しかったという感想をいただいた。交流の場としては多少賑

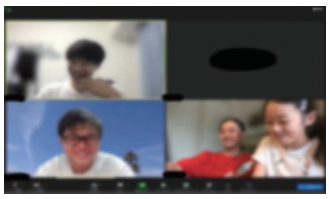
やかすぎたので、次回以降の運営の仕方を工夫したいと思う。

私の主観としては、学生側にとって、なかなか普通に過ごしていては関わることのない、小さな子供たちとのかかわりが得られたことも良い刺激となっていたのではないかと思う。今後もこのように様々な学生団体や周囲のお店ともコラボした取り組みを継続していく中で、GV がより住みやすい環境となるよう精進したい。

## さぽちむ：夏休みの宿題を終わらせたい会



実施日時：2022 年 8 月 5 日（金）10:00-16:00
参加人数：運営側 主要メンバー 3 人、学生 5 人
参加者：3 人
参加者の内訳：中学生 2 名、小学生 1 名
企 画 者：ふうか、近間 仁美、藤田 瑠久



### ○実施概要

オンライン会議システム Zoom を用いて、小中高生の夏休みの宿題を大学生と一緒に進める企画。大阪大学の学生を中心とした教育団体「SUIT」のメンバーと学生チーム「さぽちむ」のメンバーが協同で、大学生側として参加。小中高生側としては、前回のフリードリンクの企画同様、教職員寮のあるグローバルビレッジ津雲台と、patona グローバルビレッジ津雲台の入居者を対象としていたが、オンライン開催ということもあり、本イベントでは対象をより広く広げた。

### ○当日の様子

中学生 1 名と、小学生と中学生の姉妹が参加してくれた。それぞれに対し、大学生が 1 ～ 2 名ほど、1 時間～ 2 時間ほど担当する形でローテーションを組み、一緒に宿題を進めた。それぞれのやり方で工夫して、宿題を写真に撮って画面共有をしながら取り組んでいたり、単に宿題を進めるだけではなく、大学や学校での様子などの雑談も弾んでいたように思う。イベント中に、担当していた大学生が自信のない問題の際には、他の学生にも頼りながら進める場面も見受けられた。各自の得意不得意をうまくカバーしながら実施できたのではないだろうか。イベント終了後、参加者の母親より、「教え方が上手で、大変わかりやすかった」という感想や、参加していた小中学生よりお礼のお手紙をいただくなど、嬉しい出来事もあった。

### ○プロジェクトの考察

今回のイベントは、前回のフリードリンクと一続きのイベントにしたいと考えていた。そのため、計画当初はオフラインでのイベントの形を取ろうとしていたが、残念ながら最近のコロナ流行の状況を鑑み、オンラインでの開催を余儀なくされた。そのため、普段から Zoom を使用している大学生には参加しやすい形態であったが、そうでない小中高生にはハードルが高かったのではないだろうか。また、開催日が平日の日中だったこともあり、学童や部活のある小中高生には参加しにくい時間帯だった可能性もある。結果的に、参加者はごく少数ではあったが、その分密度の濃い時間を過ごせていたと感じる。

大学生側からは、普段あまり関わることのない、小中学生と一緒に宿題を取り組めた経験に価値を感じているという意見をいただけた。また、小中学生側から見ても、普段関わることのない大学生と一緒に時間を過ごしながら、大学の話などを少し年上の存在に聞くことが、今後のモチベーションにもつながっていくことを願っている。

次回以降についても、今回のイベントの結果を踏まえつつ、with コロナの時代に即して、オンライン/オフラインのどちらでも対応可能なイベントを準備していこうと考えている。また、小中高生にただ勉強を教えるというような形態ではなく、より総合/探求的な力を育む機会を提供することもできるのではないかという意見が出たため、プレゼンテーションのようななかなか形式を学ぶ機会がないにもかかわらず、将来的に必ず使うようなスキルを育てるイベントを考えていきたいと思っている。大学生側も教えるだけではなく、自分の興味関心についてのプレゼンを行うことができれば、今回の雑談から生まれていたようなワクワク感を与えることもできるのではないだろうか。次回以降のイベントについて考えられる貴重な経験を得られたと思う。

## 被ばく伝承をきく

実施日時：2022 年 11 月 27 日（日）14:00-16:30
実施場所：オンライン
参加者数：20 代から 70 代までの 9 人
企 画 者：井元 遥花、柞原 杏香

### ○実施内容

「被ばく体験を聞いて、何を感じるだろう？」「聞いてしまったわたしはどうしたらいいんだろう？」という 2 つの問いをテーマとして、被ばく伝承を聞き、参加者全員で感想を共有した。

伝承は、ヒバク 2 世の語ろうの立ち上げメンバーで広島市被爆証言伝承者として活動しておられる佐々木佐久子さんをお招きした。被ばく証言と伝承活動をするなかで考えてきたことについてお話しいただいた。

### ○プロジェクトの考察

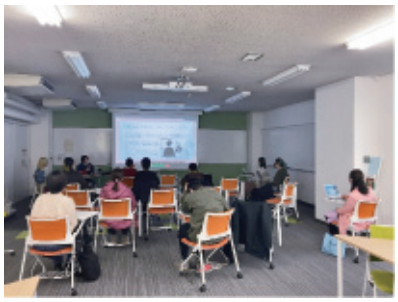
当日の参加者は、年齢の幅もひろく、戦争体験にふれた経験についてもバラバラだった。佐々木さん

は、ご家族を含む３名、全く違う年齢、立場の被ばくについて、８月６日当日だけでなく、その後の生活にも言及しながらお話しくださった。佐々木さん自身の想像する心情や、ご家族との間柄で感じていること、地理や当時の生活の様子も盛り込まれており、聞き手が想像するための工夫がちりばめられていた。

後半の感想共有では、印象に残った場面や自分の生活に引きつけて考えたことなどが共有された。実施後のアンケートでは、「それぞれの感想を共有することでより考えが深まった」との感想もあった。一方で、「聞いたひとがこれからどうしていくのかという話し合いが出来たらいい」との感想もあった。今後は、より踏み込んだ問いをあえて取り挙げ、平和学習で取り扱われることのさき、戦争体験について日常の中で考え活動しているひとが、今まさに戸惑うこと、問うていることを共有することで、あまり戦争体験に触れたことのない参加者にとっても戦争体験の新しい触れ方に出会える機会をつくる事ができるのではないかと考えている。

## 卒業生による交流会―フェミニズム・ジェンダー・セクシュアリティ

実施日時：2023 年 2 月 22 日（水）13:00-18:00
実施場所：大阪大学人間科学研究科＆オンライン
参加者数：発表者 6 名、対面聴講者 6 名、
Zoom 聴講者 21 名（計 33 名）
企 画 者：都倉 穂香、他
人間科学部 4 年生有志



### ○実施内容

ジェンダー・セクシュアリティ研究は様々な学問分野において行われていますが、それ故に同じテーマに興味を持っている学生が異なる学部や研究室に散在してしまい、交流の機会を持ちにくくなっている状況があります。本会では、そのような学生同士での交流を目的として、大阪大学学部 3,4 年生 6 名による自主研究・卒業研究の発表と質疑応答、座談会を行いました。Zoom 聴講も含め、他学部や他大学の学部生、大学院生、教員など計33名にご参加いただきました。

発表者たちの研究テーマはフェミニズム、クィア理論、男性学などがあり、研究分野は社会学、文化人類学、哲学などがありました。１人あたりの持ち時間は質疑応答を含め 40 分とし、各自スライドを用いて発表を行った後に聴講者からのコメントや質問を受け、活発な議論が行われました。

また、会の最後に行った座談会では、４～５人ほどのグループに分かれ、それぞれ研究発表の感想やお互いの興味について共有し、交流を行いました。専門分野や所属が異なる参加者同士で、研究テーマについて多角的に議論をしたり、それぞれが用いてきた研究手法について共有したりと、ジェンダー・セクシュアリティ研究を総合的に考える機会となりました。

### ○プロジェクトの考察

第１に、本会にはジェンダー・セクシュアリティ研究を行った学部生のみならず、高い専門性を持った大学院生や教員、ジェンダー・セクシュアリティ研究についてあまり学んだことのない方にまで参加をいただいた点において意義があったと考えます。ジェンダー・セクシュアリティ研究に関わってきた学部生の内部だけでなく、より広く参加をいただいたことで、多角的な視点からの発言をいただけたことが良い刺激になったと感じます。

第２に、研究発表をすることではなく、交流を重視し実現した点においても意義があったと考えます。質疑応答や座談会での意見交換を重視したことにより、これらを経て発表内容がより深められ、広がっていく様子がみられました。本会は、このような相互の発信によってこそ質の高い学びが得られるということが実感できる機会になったと考えます。

## 50周年記念 学生プロジェクト

実施日時：2023 年２月４日（土）からの約１週間
実施場所：人科棟　インターナショナル・カフェ
企 画 者：田邉　　匠
　　澁谷 純子
　　FU YUE
　　YUN YAJING

### ○ 50 周年記念 学生プロジェクト 選考結果

書類審査を通過した５つの提案を対象に 10 月 27 日（木）に公開プレゼンテーション審査を行いました。コンセプト性、メモリアル性、独創性、実現性、プレゼンテーションの５つの観点から５名の審査員により 総合的に評価しました。

それぞれに優れた個性があり拮抗していましたが、下記のプロジェクトが選定されました。

最優秀賞　参加型アート 「結ぶ、繋ぐ、結いなおす」
　　田邉 匠さん、澁谷 純子さん、FU YUEさん、YUN YAJINGさん

準優秀賞　「オープンボード」プロジェクト
　　福井 悠斗さん、峯岸 優太さん、趙 梦盈さん、陳 重道さん、張 ギョクキさん

## 2　大阪大学オムニサイト協定 OOS

「OOS（大阪大学オムニサイト）」は、2017 年 4 月、新たな共創の仕組みとして始動しました。産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援、活用します。OOS が創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。OOS 協定を活用し、これまでに様々なプロジェクトが実施されました。

### ◆2. 1　OOS 協定　2022 年度までに締結された協定（締結日順）

一般社団法人地域情報共創センター
一般社団法人全国寺社観光協会
岩手県九戸郡野田村
新安世紀教育安全科技研究院
NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク
NTN 株式会社
一般社団法人タウンスペース WAKWAK
共和メディカル株式会社
西予市野村地域自治振興協議会
NPO 法人おおさかこども多文化センター
吹田市社会福祉協議会
一般社団法人パースペクティブ
一般社団法人全国自治会活動支援ネット
一般社団法人今井町大和観光局
パナソニックホームズ株式会社（旧パナホーム）
NPO 法人北いわて未来ラボ
ジャトー株式会社
ダイハツ工業株式会社ダイハツ保健センター
大阪市教育委員会
中銀インテグレーション株式会社
愛媛大学社会共創学部
一般社団法人地域情報共創センター
大阪トヨタ自動車株式会社

### ◆2. 2　OOS 関連イベント

| 日付 | タイトル | 講演者/主催 | 場所 |
|---|---|---|---|
| 2022 年<br>8 月 24 日 | 野田学講義「農産物被害によって生じる<br>ニホンザルと人間の対立について」 | 人間科学研究科<br>山田　一憲 講師 | 久慈工業高校 |
| 2022 年<br>11 月 18 日 | 野田学講義「社会や産業の変化と技術」<br>～新しい製品サービスについての<br>ブレーンストーミング～ | 工学研究科<br>上西　啓介 | オンライン |
| 2022 年<br>11 月 20 日 | 第 2 回おもろい学（あそ）び場グローバルビレッジフェス | グローバルビレッジ<br>津雲台 | グローバルビレッジ<br>津雲台 |

野田学の取り組みは、
地域の新聞に掲載されました。

デーリー東北
DIGITAL

サルと人間の対立テーマ　地域づくりのヒント探る　久慈工高で未来学講座

2022年8月30日 18:05

岩手県立久慈工業高（藤原徳久校長）は２４日、同校で講座「地域未来学」を開いた。大阪大大学院人間科学研究科講師の山田一憲さんが「農産物被害によって生じるニホンザルと人間の対立」をテーマに講義し、動物の問題は人間社会の課題を反映していると力説。

……

山田一憲さん（左）の講義を聞く久慈工業高の生徒たち

活動報告

## 「第２回 おもろい学（あそ）び場グローバルビレッジフェス」を開催しました

11 月 20 日にグローバルビレッジ津雲台（以下、GV）にて、「第 2 回おもろい学（あそ）び場グローバルビレッジフェス」を開催しました。

当日朝はあいにくの雨でしたがイベントの開催時間が近づくにつれ、青空がのぞきはじめました。天候にも恵まれ、推計 1,200 名ほどの方々にご参加いただきました。

イベントには、OOS パートナーのパナソニックホームズ株式会社、共和メディカル株式会社、中銀インテグレーション株式会社、一般社団法人地域情報共創センター等の他、人間科学研究科の学生、GV の留学生有志、阪大アカペラサークル、阪大サッカー部が参加しました。

今後も引き続き、津雲台地域での共生の街づくりに励んでいきたいと考えております。

**オープンプロジェクト：**

グローバルビレッジコミュニティプロジェクト（GCP）

**OOS パートナー：**

パナソニックホームズ株式会社
共和メディカル株式会社
中銀インテグレーション株式会社
一般社団法人地域情報共創センター

## ◆2. 3　OOS シンポジウム

| 日付 | タイトル | 実施・主催 | 場所 |
|---|---|---|---|
| 2022 年<br>12 月 4 日 | SDG s シンポジウム　共に生きる社会を共に創る | OOS シンポジウム<br>（人科 50 周年サミット） | 大阪中央公会堂 |

REPORT

**大阪大学人間科学部・人間科学研究科 50 周年事業**
**附属未来共創センター SDGs シンポジウム**
**「共に生きる社会を共に創る－貧困、不平等、災害にあらがい住み続けるまちづくり－」**

日時：2022 年 12 月 4 日（日）9:30-13:00
場所：大阪市中央公会堂　大集会室
主催：大阪大学大学院人間科学研究科 附属未来共創センター

### プログラム

【開会挨拶】：村上靖彦（附属未来共創センター・センター長）
【附属未来共創センターの紹介】
①附属未来共創センターの取り組み：木村　友美（附属未来共創センター・講師）
②未来共生イノベーター博士課程プログラム：榎井　縁（附属未来共創センター・特任教授）
【ディスカッション①　貧困・不平等にあらがう】
コーディネーター：志水　宏吉（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
パネリスト：藪中孝太朗（株式会社 IC・代表取締役）
：堀口　安奈（株式会社 Adelante・代表取締役）
：岡本　工介（一般社団法人 タウンスペース WAKWAK・事務局長）
：福井　康太（大阪大学大学院法学研究科・教授）
【ディスカッション②　住み続けられるまちづくり―大災害の時代に】
コーディネーター：石塚　裕子（附属未来共創センター・講師）
パネリスト：高原　耕平（公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構
人と防災未来センター・主任研究員）
：小田　祐士（岩手県野田村役場・村長 小田祐士）
：玉川　裕貴（岩手県立久慈工業高等学校 3 年生）
：山形　一真（岩手県立久慈工業高等学校 3 年生）
：高岡　伊織（愛媛県西予市野村地域高校生グループ「Nジオチャレ」・代表）
：稲場　圭信（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）
【指定コメント】：金田　安史（大阪大学理事・副学長）
：三成　賢次（大阪大学理事・副学長）
：堂目　卓生（大阪大学・社会ソリューションイニシアティブ長）
【閉会挨拶】：澤村　信英（附属未来共創センター・副センター長）

### 開催趣旨

誰ひとり取り残さない社会の実現に向けて、人間科学研究科附属未来共創センター（以下、未来共創センター）では、人間科学研究科と市民、NPO・NGO、行政、企業など社会と連携してきました。「共

生」を担う人材育成を行う「未来共生イノベーター博士課程プログラム」が 10 周年、「共創知」の創出のしくみである「大阪大学オムニサイト協定（OOS）」は 5 周年を迎えました。本シンポジウムでは、未来共創センターが取り組んできた教育、研究、活動の成果と課題を通じて、共に生きる社会と共に創る社学連携の可能性を討論しました。

## 内　　容

【開会挨拶】

開催の挨拶では未来共創センター・センター長の村上靖彦先生より未来共創センターの特徴について紹介されました。2016 年に設立された未来共創センターは二つの特徴を有しており、一つには社会の様々なアクターと共に取り組むことを目的とした組織であること。二つ目に弱い立場にある人々と共に行動を起こす組織であること。現在、社会から疎外されている人々は数多く存在しており、未来共創センターではそういった方々と共に行動する一般的な大学組織とは異なる組織であることが説明されました。

【附属未来共創センターの紹介】

木村友美先生から未来共創センターの活動に関する説明が行われました。人間科学研究科では「国際性」「学際性」「実践性」という三つの柱を掲げているが、未来共創センターではその中でも「実践性」にフォーカスし、多様な組織と市民の実践性をもとに共創知を作りあげていく活動をサポートする立場にある。組織的な繋がりでは大阪大学オムニサイト協定（以下、OOS 協定）でそれぞれの組織と継続的かつ発展的な活動を支援しており、学生の育成では未来共生プログラムが提供されていることが紹介されました。

次に榎井縁先生より「未来共生プログラム」に関する説明がなされました。未来共生プラログラムでは 2013 年に文部科学省の博士課程リーディングプログラムの複合領域多文化共生の分野で採択されたプログラムであること。2018 年までは人間科学研究科の他に五つの研究科から履修を募っていたが、その後人間科学研究科に内部化され、未来共創センターと共に活動をしてきました。このプログラムでは多様な他者に対する深い理解と敬意を持って、現場に寄り添うと同時に俯瞰的な観点でローカル・グローバルな次元で多文化共生を実現できる人材を育成することを目指していることが紹介されました。

附属未来共創センターの紹介の様子

【ディスカッション①　貧困・不平等にあらがう】

本シンポジウムのメインとなるディスカッションパートでは、前半は志水宏吉先生をコーディネーターとし、「貧困・不平等」をテーマにディスカッションが行われました。パネリストには、大阪市内を中心にしんどい地域にいる子どもたちを支援している株式会社 IC の代表取締役である藪中孝太郎さん（未来共生プログラム一期生）、大阪をベースに在日ペルー人女性の支援・自立を行っている株式会社 Adelante の代表取締役である堀口杏奈さん（未来共生プログラム三期生）、高槻市をベースに一人も取りこぼさない、みんな安心できるまちづくりをテーマに様々な取り組みをしている一般社団法人タウンスペース WAKWAK の事務局長である岡本工介さん（未来共生プログラム七期生）、そして、大阪大学大学院法学研究科教授であり、未来共生プログラムの運営に関わってきた福井康太先生の 4 名です。

最初にそれぞれの団体の事業内容や取り組んでいる課題に対する説明が行われました。しんどい地域の子どもの学力格差に取り組む藪中さん、外国にルーツを持つ子どもとしての当事者の経験を持っており、在日外国人女性が抱える不安定な立ち位置に対しての活動を行っている堀口さん、そして、地域・

家庭・行政の連携を高槻市全体に広げながら、社会的包摂のまちづくりに取り組んでいる岡本さんに対して、福井先生からさらにそれぞれの活動に対しての深掘りが行われました。藪中さんの事業においては、子どもたちの居場所自体は既にある程度あるにも関わらず、子どもたちの低学力が置き去りにされていることが問題となっており、子どもたちが学びに向かうための環境づくりが必要であり、それを支援するための資金が大きな問題であることが語られました。次に堀口さんは、外国にルーツを持つ子どもたちの問題を取り組むにあたって、親の経済状況が安定しないことが、子どもたちの問題を作り上げていることもあるという状況を見て、外国人の親たちの経済的な安定を通じて、子どもたちの生活の安定、向上を目指していることが述べられました。岡本さんの事業では団体自体の次世代の担い手が大きな課題となっていること。しかし、現在は多くの大学生が社会問題に対しての意識を高く持っていることから、大学生を次世代の担い手として迎え入れることができるのではと語りました。

最後に志水先生からそれぞれの事業における難しさと喜びは何かと質問が投げかけられました。藪中さんは事業における悩みが多すぎて、難しさがわからないという一方で、長年事業を行う中で、支援をしてきた子どもたちが大人になり、一緒に支援する側として事業に携わってくれることに喜びを感じていると振り返りました。堀口さんは日々売り上げをあげていかないと外国人女性を支援するという目標が達成できないことの難しさを感じているが、事業を通して外国人女性がエンパワーされる場面を見ることに喜びを感じていると語りました。岡本さんの事業では様々な人々が事業に携わる中で、意見の違う人々をまとめあげることに難しさを感じているが、反面個人では達成できないことをネットワークの力で達成することが喜びであり、支援対象の子どもたちや親の姿を見ることで達成感を感じると語りました。

ディスカッション①の様子

【ディスカッション②　住み続けられるまちづくり―大災害の時代に】

後半は石塚裕子先生をコーディネーターとし、「住み続けられるまちづくり―大災害の時代に」をテーマにディスカッションが行われました。パネリストは東日本大震災で被災地の一つである岩手県野田村から小田祐士村長、そして、同じく野田村から岩手県立久慈工業高等学校の生徒であり、震災を経験した玉川裕貴さんと山形一真さん。また、2018 年に起きた西日本豪雨で被災した愛媛県西予市野村町より地域の高校生グループ「Nジオチャレ」の代表を務めている高岡伊織さん、公益財団法人ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 人と防災未来センターで主任研究員を務めている高原耕平（未来共生プログラム 2 期生）、そして、最後に社会学の観点から防災を研究している稲場圭信先生の 6 名です。

ディスカッション②の様子

最初にそれぞれのパネリストから話題提供がされました。小田村長は震災当時の映像を振り返りながら、村がどのような被害に遭い、そして、どのように復興していったのかが述べられました。玉川さんと山形さんからは被災当時 6 歳であった当事者としての経験が語られました。玉川さんと山形さんは現在の野田村は復興し、住みやすい村になっているものの、若者離れが起きていることによって、将来の担い手が少なくなっていることを問題提起されました。そこで IT 技術を活用しながら、村の将来を繋げていきたいと語られました。高岡さんからは被災した町の現状を見て、高校生である自分たちに何ができるのかと考えた時に、高校生グループが積極的に町の復興活動に関わることが、地域の人々を勇気づけることができると考え、現在、取り組んでいる活動を紹介されました。高原さんからは研究者の立場から話題提供されました。高原さんは、これまでは科学の力を活用

しながら災害に抗うことを考えてきたが、今後は災害と共生する考えが必要ではないかと指摘されました。最後に防災に関するアクションリサーチを行っている稲場先生からは、それぞれの地域の多様なアクターをつなげることによって減災に取り組むがことができ、社会的なネットワークを新たに構築している事例が紹介されました。

それぞれの話題提供に対して、高校生パネリストの玉川さん、山形さん、高岡さんからは他の地域の被災者の話を聞けたことが勉強になったとコメントがされました。高原さんはこれまでの伝承活動は高齢者が中心であったが、高校生など若者からも語ることの重要性が指摘されました。また、小田村長は話題になった自然災害との共生について、自身の経験から防災という災害を防ぐことは困難であるが、減災または自然との共生の必要性は経験上、理解していると述べました。また、被災の経験から利他主義の重要性についても気付かされたと言及されました。稲場先生は、利他主義は様々な被災地域で見られる考え方であり、被災された方々は一方的に助けられる対象ではなく、受けた恩を次に繋げていく力強い存在であると話されました。最後にそれぞれのディスカッションを通じて、言語化されていない地域の人々の知識や大切さ、減災という考え方、さらには災害を人災にさせないことの重要性を再確認されました。

【指定コメント】

ディスカッション①と②の後に、大阪大学理事・副学長である金田安史先生と三成賢次先生、そして、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（以下、SSI ）の長である堂目卓生先生からそれぞれの指定コメントが述べられました。

まず堂目先生からは SSI は命をキーワードに掲げる大阪大学のシンクタンクであり、附属未来共創センターと様々な活動を協働してきた組織であると紹介されました。堂目先生は本シンポジウムでは「自然（Nature)」が二つのディスカッションを結びつけるキーワードであり、狭い意味では海や大地を意味する自然であり、広い意味では「人間（Human Nature)」を示す。両方の「自然（Nature)」には恩恵と危害をもたらす二面性を持っており、それらの二面性と向き合いながら、困難の中で互いを助け合いながら社会を作り上げていくことが重要であると述べられました。

次に三成先生からは、これまでの大学の役割として社会にアウトリーチしていくことが求められてきたが、共生・共創の考えに基づきアウトリーチだけでなく、現場の人々と作り上げていく考え方や思いを大学に再び返すことが重要であると語られました。そして、その返ってきた考えや思いがさらに大学における教育・研究を鍛え直すために必要な過程であることが述べられました。それだけに留まらず、大学がどのように変わったのかを社会に説明・理解させていくこともまた重要な点であり、附属未来共創センターはその一旦を担っていることが述べられました。

最後に金田先生からは大学では教育・研究・社会貢献がこれまでの使命とされてきたが、これからは教育・研究、そして、社会を変えることが大学に求められている使命であると述べられました。社会を変えるということは、全ての人々が社会で活躍できる場を作ることであり、個々人が社会の中で幸せを感じることであると語られました。そして、大阪大学では社会システムの変革を担う立場にあり、客観的なデータをもとに社会の変革を示していく必要があることが述べられました。そして、社会の中に学びの場を組織的に作っていくことが重要であり、大学の中だけではなく、現場で人々と共に対話しながら作り上げていくことが必要であり、附属未来共創センターが現在行っている活動の重要性が改めて語られました。

登壇者の集合写真

【閉会挨拶】

澤村信英先生から登壇者に対しての感謝の言葉と共に、未来共生プログラムをはじめとするプロジェクトを通じて、学生だけではなく教員側も成長することができたと述べられました。今後も未来共創センターでは今後も社会と大学を結びつける活動を担っていく必要があると表明され、シンポジウムは締め括られました。

【附属未来共創センター常設展示ブース】

シンポジウムでは大阪市中央公会堂の地下1階の大会議室でポスター展示及びブース展示が 2 日間にわたって行われました。主に OOS の協定先の団体や未来共創センターで展開されているオープンプロジェクトのポスター・ブース展示が行われました。ポスター展示では 7 団体の OOS 先の協定先の活動紹介、13のオープンプロジェクト、さらに学生プロジェクトのこれまでの成果に関するポスター展示が行われました。そして、ブース展示では OOS 協定先の 5 団体と未来共生プログラム等のブースが設置され、共同で開発した製品や日々の活動の詳細な説明を行っていました。それぞれのポスターやブースには多くの来場者が足を止め、これまでの成果を興味深く眺めていました。

常設展示ブースの様子

# 3　オープン・プロジェクト

学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社学共創活動を展開するプロジェクトとして、2020 年度から未来共創センターを拠点に開始されました。本プロジェクトを通じて、共生社会実現に向けての実践的な研究、教育活動を展開しています。2022 年度は継続 12 件、新規 1 件、計 13 件のプロジェクトが採択されました。

| | プロジェクト | | プロジェクト |
|---|---|---|---|
| 1 | Ethnography Lab | 8 | マイノリティ教育ラボ |
| 2 | 災害ボランティアラボ | 9 | 老いと死の研究ラボ |
| 3 | 心理・行動フォーサイトラボ | 10 | 緒方らぼ |
| 4 | 地方における人材共創プロジェクト | 11 | 哲学の実験オープンラボ |
| 5 | 子どもの安全ラボ | 12 | MeW プロジェクト：<br>生理用品を通した月経の諸課題の実証研究 |
| 6 | 障害ラボ | 13 | 地域の食とプラネタリーヘルス |
| 7 | グローバルビレッジ・コミュニティ・<br>プロジェクト（GCP） | | |



## ◆3. 1　オープン・プロジェクトの活動

### ◎Ethnography Lab　担当教員：森田 敦郎

**ウェブサイト：**https://www.facebook.com/OsakaUniversityForesight/posts/pfbid0TpH2JwSVWNtfN7JzLMSNqoZw3oFbn5YtLE9YmwbG1ym4LbHNPNW3ZdUNiSXM1rFDl
https://www.fvk.jp/project/project-energyefficiency
https://fvkopening-chijiwa.peatix.com/view
https://fvkopening-1sttalk.peatix.com/view

**社学・社会貢献イベントの件数と参加人数：3件／参加者 120 人**

大学院共通科目「フィールド調査法特講」のコーディネートと開講を引き続き行なった。同授業は社会学・人間学、教育学、共生学系から 45 名以上の大学院生が受講した。

代表の森田が大阪大学の 100%子会社として設置された大阪大学フォーサイトの取締役に就任し、本プロジェクトの成果を産学連携の場で活用する体制を構築した。特に、本学の人文社会系の学術知をビジネスに活用するスクール事業の構想において 本プロジェクトの蓄積は中心的な役割を果たしている。また、3 月には同社と協力してデザイナーとビジネス・パーソン向けの講座を試験的に実施し、好評を得た。

本プロジェクトの成果をもとに、科研費挑戦的研究（開拓）を獲得し、エスノグラフィとデザイン、モノづくりを結びつける新たな研究手法の開発を行っている。このプロジェクトには、OOS 協定のパートナーである一般社団法人パースペクティブおよび株式会社ロフトワーク、有限会社ひのでやエコライフ研究所の協力を得ている。また、一般社団法人パースペクティブおよび京都工芸繊維大学とともに京

北地域における持続可能な林業および木材産業の確立のための事業を継続している。さらに、株式会社 Re: Public と京都工芸繊維大学が主導するコンソーシアムであるサキュラー・デザイン・プラクシスに参加し、コクヨなどの参加企業に対して循環的な資源利用のための知見を提供することとなった。

これらの活動をさらに発展させるべく、3 月には一般社団法人パースペクティブに協力して、市民工房「ファブビレッジ京北」の設立に貢献した。Ethnography Lab はファブビレッジ京北の研究教育事業である「ラボ事業」において主導的な役割を果たしている。また、Ethnography Lab での活動に基づいて執筆された修士論文の発表会を調査対象者である京北の林業関係者に向けて行い、出席者から好評を得た。これらファブビレッジ京北における Ethnography Lab の一連のイベントはオンラインでも配信し、多数の視聴者を得た。

## ◎災害ボランティアラボ　担当教員：渥美 公秀

**社学・社会貢献イベントの件数と参加人数：5件／参加者 610 人**

### （1）防災ウォーキングお楽しみ会（1回）

コロナ禍で外出の機会が減り、運動不足などから体調を崩したり、人とのつながりが希薄する中で、防災意識の低下を防ぐために開催した。

日　程：4 月 16 日（土）10:00〜11:30
場　所：千里南公園（参加者：約 10 人）
テーマ：「歩く」×「災害食」
内　容：千里南公園内の 1 周約 1 キロのコースを使って、ウォーキング体験会を実施した。今回は、「歩く」×「災害食（食べ物）」をテーマにみんなでウォーキングを楽しみながら、「災害時にはどんな食べ物がいいか」「普段準備している災害食は何か」などのお題について話し合ってもらい、最後に全体で意見を共有した。お天気も良く、参加者全員が満足のいくとても有意義なプログラムになったのではないかと思う。
共　催：未来共創センター
（コロナ感染の影響で、開催は 1 回に留まった）

### （2）独居高齢者への「よりそい隊」の活動

新型コロナウィルス学習会の成果として、学生グループ「すいすい吹田」が中心になって始まったこの「よりそい隊」の活動も 4 年目に入り、今年度も五月が丘地区の独居高齢者を対象にした活動を継続した。お手紙とイベントのお手伝い

日　程：寄り添い隊通信（3 回発行：5/24、11/1、2/6 日）
場　所：吹田市五月が丘地区（参加者：約 120 人）
内　容：独居高齢者約 130 名に、阪大人科の学生が書いた通信を、五月が丘福祉委員の皆様により戸別に届けてもらった。
共　催：すいすい吹田
協　力：吹田市社会福祉協議会（五月が丘福祉委員会）

### （3）防災パーク@そねちか

南海トラフ巨大地震による津波や、淀川の氾濫による浸水被害などを想定した、都市部での防災啓発イベントを開催した。

日　程：2022 年 11 月 5 日（土）・6（日）
場　所：大阪梅田 曽根崎地下歩道（参加者：約300人）
内　容：防災ウォークラリー、災害食の展示、避難所体験、停電時の避難体験、無電柱化 VR 体験、大阪北区ジシン本紹介、など。
共　催：国土交通省近畿地方整備局大阪国道事務所、大阪ダイヤモンドシティ協議会、大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター、大阪大学災害ボランティアラボ
協　賛：大阪大学人間科学部・人間科学研究科創立 50 周年記念事業委員会

### （4）大阪大学人間科学部創立 50 周年記念事業

日　程：2022 年 12 月 3 日（土）・4 日（日）
場　所：大阪中之島公会堂（参加者：約 100 人）
内　容：災害ボランティアラボの活動ポスターを展示

### （5）防災ウォークラリー

日　程：2023 年 1 月 29 日（日）
場　所：無印良品グランフロント大阪店（参加者：約 50 人）
内　容：店内に 7 カ所のポイントを予め設置し、参加者は受付時に用紙を受け取り、そのポイントを探してまわる。各ポイントでは防災クイズにチャレンジしてもらうというプログラムを実施した。
協　力：NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク

## ◎心理・行動フォーサイトラボ　担当教員：三浦 麻子

**ウェブサイト：https://pbl-f.hus.osaka-u.ac.jp/**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：6 件／参加者 80 人**

第 2 回ワークショップ

心理・行動フォーサイトラボでは、人間科学部・人間科学研究科を主とする大阪大学の学生を対象とした PBL として、心理学・行動科学を方法論として社会的文脈における人間の心理と行動のメカニズム（インサイト）の解明とその変容の方法、すなわち能動的な将来予測である「フォーサイト」を明らかとするための共創的研究プロジェクトを推進している。今年度はターゲットユーザーとシーンを鉄道利用（者）として、JR 西日本テクシアの 3 名の実務家にもステークホルダーとしてご参加いただいた。春夏学期は、鉄道駅の利便性向上のための技術開発拠点の見学も含めた現状のフィールドワークにもとづく問題設定をおこない、その問題を生じさせている心理社会的要因を考えながら、どのような方向に行動を変容させるか、そのためにはどのような解決策が考えられるかを 3 グループに分かれて検討し、「行為者の戦略性と規範性」「エスカレータを「歩く」行動原理」「迷惑行為への認知」

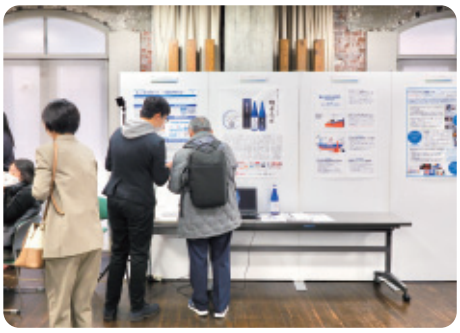
にテーマを絞り込んだ。秋冬学期は、こうした春夏学期の検討結果を踏まえて、駅空間において一般市民の戦略的行動や規範的行動がそれぞれどのような場面で生起しやすく、またそれらの行動に対しどのような認識をしているのかの実態を解明するための Web 調査を実施して、分析結果をステークホルダーに報告した。また、昨年度の成果「健康行動変容のための情報伝達と仕掛けによるヘルスプロモーション介入の効果検証」を日本健康心理学会第 35 回大会（2022/11/19-20@東北学院大学）で発表した。

JR 西日本テクシア開発拠点見学

## ◎地方における人材共創プロジェクト　担当教員：吉川 徹

**ウェブサイト：**https://www.src.shimane-u.ac.jp/docs/2021122300012/
https://youtu.be/KdW2IfJi、https://fb.me/e/1qSqDHxxj-Do

**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／参加者 50 人**



このプロジェクトでは、地方県における中等教育及び県内高等教育機関の在り方を調査分析し、若年層の人口流出の実態を、教育社会学、家族社会学、地域社会学の観点から明らかにしてきた。今年度はその知見を学術的な成果として公表し、近未来に向けての課題を提示した。

具体的な活動としては、大学院修士 2 年次の松田萌黄が沖縄県立辺土名高等学校の教育実践についてフィールドワークを行った。その成果は、地域が抱える若年人口流出、若年層の雇用の不安定性、経済的な困難が、学校や教員の取り組みによってどのように変化しつつあるかという問題設定で修士論文としてまとめられている。この研究は別の形態で刊行することを計画している。

山陰地域における研究については、吉川徹を中心として島根県、鳥取県での聞き取り調査を継続しつつ、2022 年 1 月に開催された市民シンポジウムの講演記録を刊行した。

研究のアウトリーチにかんしては、2022 年 12 月に人間科学部・人間科学研究科 50 周年記念事業会場において、オープンプロジェクトポスター展示に参加した。

研究成果の学術的な取りまとめについては、未来共創センターのテーマ研究会に参加して報告と議論を行った。その成果は、ジャーナル『未来共創』10 号に特集論文として投稿している。

## ◎子どもの安全ラボ　担当教員：中井 宏

**ウェブサイト：**https://www.nhk.or.jp/osaka/kodomo_kiken/
hug-kum https://hugkum.sho.jp/422962
https://kosodatemap.gakken.jp/life/together/42044/

**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／参加者 70 人（オンライン参加含む）**

2020 年 5 ～ 6 月に大阪大学未来基金「クラウドファンディング基金」寄付金募集実施プロジェクトとして資金を集めた子どもの安全啓発本については、電子書籍としての出版に向け作成中（現在作成中）である。この本においては、人間科学研究科の大学院生 3 名に、子どもの事故防止と各自の研究内容を絡めたコラムを執筆してもらった。

また以下のような、子どもの事故防止のための啓発・実践活動を進めている。

■委員・講演・研修等

- 中央教育審議会初等中等教育分科会学校安全部会　臨時委員
- 全国学校保健安全研究大会　課題別研究協議会 第９課題「教科等における安全教育」　講師
- 大阪市ファミリーサポートセンター援助会員養成講座　講師
- 高知県土佐市立蓮池小学校安全研修　講師
- 大阪大学医学部保健学科「学校保健学」　ゲストスピーカー

■教材等監修

- NHK 大阪製作動画「知ってる？こどものキケン」監修　子どもの転落事故、誤嚥、水難について
- キョクトウ「かんがえる学習帳」表紙裏コラム監修　水難事故予防、防犯について
- 小学館の子育て情報サイト「hug-kum」コラム監修　誤嚥について
- Gakken 子育て情報サイト「学研こそだてまっぷ」コラム監修　子どもの視野について
- カードゲーム「デンジャラ ZOO」を大阪書籍印刷と共同で開発（JR 西日本あんぜん社会財団の助成金による）

■メディア出演

- NHK 大阪ぐるっと関西おひるまえ出演　子どもの転落事故について
- 産経新聞、朝日新聞、NHK 大阪取材対応



## ◎障害ラボ　担当教員：石塚 裕子

**ウェブサイト：https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/reports/220331a/**
**https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/reports/220622a/**

**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：１件／参加者35人**

阪大エコレンジャーの業務に参与し、50 周年記念事業として「エコ・ガーデン」の実施、エコレンジャー活動報告会の開催、共生学系２回生の実験実習と連携を行った。

**〇エコ・ガーデン**

人間科学部・人間科学研究科 50 周年記念事業の一環として、東館１階と２階、正面玄関にお花による彩を与える事業を１年間実施した。定期的な水やり、花の植え替え作業、土のリサイクルなどを通じて、エコレンジャーの新たな業務の発掘と、学生、教職員との交流の機会をつくった。また、花の苗を水害の被災地（熊本県人吉市）から取り寄せて、被災地支援としての位置づけも行った。

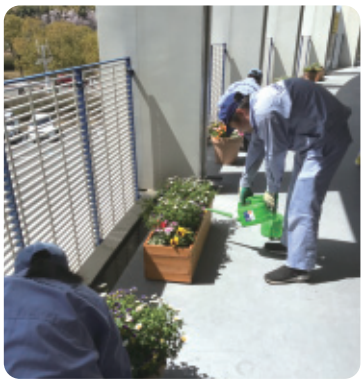
**〇エコレンジャー活動報告会（2022 年 10 月 28 日）**

エコレンジャーの業務や活動を広く知ってもらう機会として活動報告会を開催した。スタッフから公募した７名の有志が、約１ケ月（３回）の準備作業を行い、日頃の業務内容や昨年度実施したキャンパス調査の結果の紹介、エコ・ガーデンの活動を報告した。学生、教職員が 35 名も参加し、活発な質疑応答があるなど、交流の良い機会となった。

**〇コミュニティ・ガーデン（共生学系実験実習との連携）**

共生学系２年生の実験実習として実施している、コミュニティ・ガーデンの花植作業にエコレンジャーのスタッフ10名が参加した。今年で３回目の参加となった。

エコレンジャーとの協働活動を通じて、多様な人が参加できるセーフティな参加のデザインのあり方や、障害のある人の就労環境のあり方について分析し、学会等で報告する予定である。



## ◎グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP）
## 担当教員：稲場 圭信

**ウェブサイト：http://patona-suita-tsukumodai.jp/**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：４件／参加者1,300人**

・GCP 会議、GV 津雲台街づくり協議会の会議
４回開催した。
・グローバルビレッジ津雲台のオープン２周年記念イベント
「第２回　おもろい学び場　GV（グローバルビレッジ）フェス」を開催した。日時：11 月 20 日。グローバルビレッジ津雲台の各テナント、大阪大学関係者、留学生をはじめ子どもからお年寄りまで、幅広い世代に喜んでいただけるイベントの数々で、大盛況のうちに楽しい時間を共有した。

・人科共生学系の実験実習１のフィールドとして GV を活用し、GV の高齢者との交流会なども実施、上記のフェスなどにもスタッフとして参画。
・「みんなの広場　七夕まつり」七夕のたんざくを飾るイベントを開催。
開催日時：2022 年７月３日（日）
場所：日本のいいもの食堂「ハレとケ」前ピロティ
https://integration.nakagin.co.jp/ghu-senri/news/281.html

・「大阪大学　サッカー部　試合応援」
GV 津雲台の「グランヒル・ユニバ中銀 千里つくも台」の入居者が交流のある大阪大学サッカー部の試合に応援参加。
開催日時 ： 2022 年 6 月 12 日
場所 ： 大阪大学吹田グラウンド
https://integration.nakagin.co.jp/ghu-senri/news/259.html
・「体操教室」
開催日時 ： 2022 年 4 月 22 日
主催 ： グローバルビレッジ津雲台街づくり協議会
共催 ： 訪問看護ステーションあかり訪問看護ステーション
・その他、GV 住民の生活満足度調査やセミナーなどを実施

## ◎マイノリティ教育ラボ　担当教員：榎井 縁

**ウェブサイト：https://www.minoritylab.net**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2 件／参加者 70 人**

「つばめ」活動風景

2022 年度は、2020 年度から展開しているマイノリティ支援活動を継続した。コロナ災禍から始められた大阪大学大学生を中心とした学習支援グループ「つばめ」は、中高生を対象にオンライン居場所支援と学習支援の他、地域ユースプラザにボランティアスタッフとして参加し、中高生と対面で関わる緩やかなトークや学習支援をおこなった。また、9 月には「大学生図鑑 1 ワークショップ」を主催し、大学院生による対話ワークショップを中高生対象に行った。

コロナ禍に関する情報や大阪府教育庁作成の家庭学習教材などを 14 か国語に翻訳し、大阪府 HP およびマイノリティ教育ラボ HP に掲載してきた翻訳プロジェクトでは、小・中学生・高校生のための数学多言語対応版動画コンテンツなどを京都教育大学と連携しながら紹介した。

多言語絵本プロジェクトとして大阪府地域教育振興課と連携し大阪大学の学生によるイラストと多言語の音読による『多言語の絵本紹介動画「いろんなことばでえほんをたのしもう！」』（「ねずみのよめいり」中国語「あかずきん」フランス語「白藤江で軍服を洗う」ベトナム語「ガラナ」ポルトガル語）を大阪府教育庁 YouTube アカウントにあげた。

多言語絵本プロジェクト

人文学研究科（日本語学専攻）、日本語日本文化教育センター、全学教育推進機構、国際共創大学院学位プログラム推進機構と連携する「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」を開発し、人間科学研究科が幹事部局となり 2022 年から大学院等高度副プログラムが実施されている。具体的には、人間

科学研究科の教員、人文学研究科の教員、大阪府・市教育委員会が連携し、全学の留学生およびマイノリティに対する教育・福祉的支援に関心のある大学院生を対象とした社学連携型の教育プログラムであり、今後専攻した学生たちがマイノリティ教育ラボとしても活動できるようにしている。

夜間中学校プロジェクトは、大阪府教育庁小中学校課と連携しながら府内の夜間中学校と活動を展開した。①夜間中学校の従来のリテラシー教育に関する資史料の保存と分析。②夜間中学校関係者（生徒、教諭、外国人児童生徒支援員、日本語指導支援員）へのインタビューによるニーズ調査の実施とその結果に基づく今後のリテラシー教育の提案のために、大阪府の夜間中学連絡協議会などへ参加した。また、守口市さつき学園（夜間中学）での研修会などに協力した。

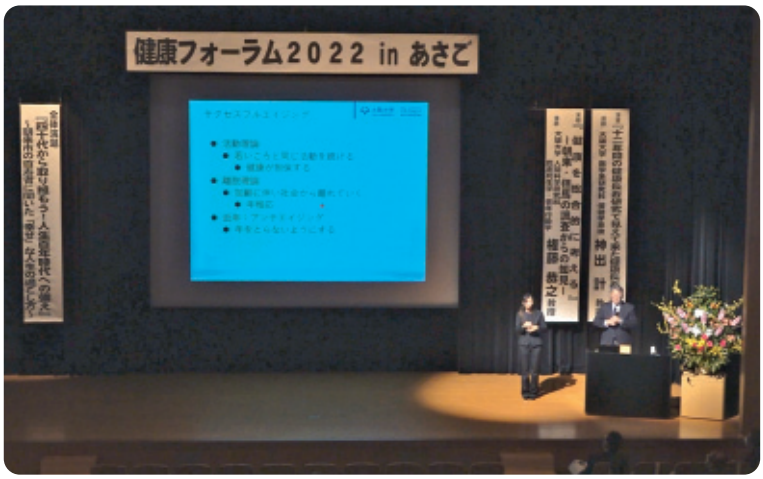
## ◎老いと死の研究ラボ　担当教員：権藤 恭之

**ウェブサイト：http://gerontology-osaka.jp/**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1件／参加者130人**

2022年度には、4度の勉強会を実施した。2022年5月25日（水）に行われた勉強会では、大阪大学大学院医学系研究科の樺山舞氏を講師として招へいし、「地域行政における高齢者の健康寿命延伸に向けた取り組み」という題目で、地域行政が健康長寿の延伸を目指して行っている取り組みと現状についてご紹介いただいた。参加者は約50名であった。7月6日（水）には、大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所の遠座俊明氏をお招きし、「高齢者のプチ就労の企画・開発について」という題目で、宝塚市を中心に行われている高齢者就労の仕組みづくりの実践をご紹介いただいた。参加者は約50名であった。11月2日（水）には、東北大学加齢医学研究所の野内類氏をお招きし、「高齢者の認知機能や日常生活技能を向上させる生活介入技術の開発と実証」という題目で、認知機能向上を目指した数々の介入研究をご紹介いただいた。参加者は約35名であった。さらに12月7日（水）には、イリノイ州立ノースイースタン大学のMasami Takahashi氏に、「成人指定R-65：オトナの心理学2022」という題目で、日本ではあまり研究されていない「叡智」の研究と、高齢期におけるLGBTQ問題を取り上げていただいた。参加者は約45名であった。これらの勉強会は、現地での会場およびZOOMを用いたハイブリッド形式で開催された。大学や研究機関の関係者のみならず、専門職から一般の方まで、幅広い方々にご参加いただいた。

また、2022年7月9日（土）には、第28回精神神経内分泌免疫学（PNEI）研究集会を共催した（主催：公益社団法人日本心理学会 精神神経内分泌免疫学研究会、日本認知心理学会 高齢者研究部会）。参加者は、会場・ZOOMを含め約70名であった。

さらに2023年3月12日（日）には、「健康フォーラム2022 in あさご」を共催した。「40代から取り組もう！人生100年時代への備え～朝来市の百寿者に聞いた「幸せ」な人生の過ごし方～」というテーマで行われ、大阪大学医学系研究科の神出計教授と同人間科学研究科の権藤恭之教授が、長年朝来市と共同で実施してきた健康長寿調査の結果を報告した。このイベントには、地域住民を含む約130名にご参加いただいた。



朝来市での講演会の様子

大阪大学人間科学部設立50周年記念イベントで、企業との共同研究に関する展示を行った。

50周年イベントの展示

## ◎緒方ラボ　担当教員：川端 亮

**ウェブサイト：https://nomuraneo.wixsite.com/toppage**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4 件／参加者 226 人**

- 2022 年 5 月 7 日にがいなんよ大学 in のむら第 6 講として、「『関係人口いっぱい地域』に学ぶ～北から南から先進事例～」を開催
- 2022 年 8 月 20 日は、がいなんよ大学 in のむら第 7 講として、「IT つながり講座」の 2 回目として、「はなおでんがんの『ねらえ！万バズのむら！』」を開催
- 2022 年 9 月 23 日から 25 日にかけてがいなんよ大学 in のむら第 8 講として「全国高校生まちづくりサミット 2022 in のむら」を開催
- 2022 年 10 月 15 日がいなんよ大学 in のむら第 9 講として復興支援を語り合う－大学の伴走者の地域との向き合い方を考える－」を実施
- 「がいなんよ大学 in のむら」の講義はすべて、10 分程度の動画にまとめられ、YouTube に「ノムライクチャンネル」としてアップ
- 日本酒「緒方洪庵」第二弾　約 2,200 本を醸造、販売

がいなんよ大学 in のむら　第 6 講
はなおでんがんの「ねらえ！万バズのむら！」の最優秀作品

がいなんよ大学 in のむら　第 8 講
全国高校生まちづくりサミット2022 in のむら　閉会式

## ◎哲学の実験オープンラボ　担当教員：野尻 英一

**ウェブサイト：https://exphopenlabo.hus.osaka-u.ac.jp**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：10 件／参加者 700 人**
**国際シンポジウムの件数と参加人数：１件／40人**

2022 年度は本プロジェクトを開始して二年目にあたるが、発展の年となった。

４月には外部資金（三菱財団社会福祉事業・研究助成）による大型メタバースイベント「自閉症学超会議！」を共催のかたちで開催した。４月２日から９日まで８日間にわたりのべ 500 名を超える参加者を得ることができ、専門家、実践家、当事者とその関係者、一般参加者が集うオンラインコミュニティ空間を実現、社会実装の着実な成果をあげることができた。メタバースを用いた大型学術イベントとして国内先駆例となった。

メタバース空間で開催された「自閉症学超会議！」における交流の模様

６月には日本ヘーゲル学会大会におけるメインシンポジウム「ヘーゲルと精神分析」を共催、７月には日本学術振興会外国人研究者招へいプログラムとの連動、および早稲田大学 SGU グローバルアジア研究拠点との共催として国際パネルディスカッション「竹内好のアジア主義と現代―転移関係を超えて―」を開催した。米国ウィスコンシン大学ヴィレン・ムーティ教授、コーネル大学酒井直樹名誉教授らにご登壇いただき、活発かつ充実した議論が行われた。同７月には有志学生団体 minoria との共催で聴覚障害をテーマとした「バリアフル座談会」が開催された。10 月には、教育人間学＆比較文明学研究室合同合宿を開催、また学生団体「さぽちむ」との共催によりグローバルビレッジ津雲台を舞台として地域住民、留学生らとの交流スペースの構築を企図した「フリードリンク」イベント、小中学生らに体験してもらう「プレゼン大会」が開催された。

小中学生が参加した「プレゼン大会」の模様

研究会形式の公認プロジェクトは、「美的近代研究プロジェクト」「ラカンと現代社会プロジェクト」「マルクス主義的社会理論研究会」「現代思想におけるハイデガー研究会」の計４つが学生主体により継続されている。プロジェクトごとに毎週、また毎月などのペースで研究会が開催されている。

企業と提携したインターンシップ企画は、株式会社レイ・クリエーションにご協力いただき、４月と２月の２回開催され、計三名の学部学生が参加した。

今年最大の活動トピックとしては、社会に向けたアウトリーチ活動として、ラボ公式ラジオ放送局「PiXOL Radio」を開設し、インターネット・ライブでの放送を開始したことである。５月にパイロッ

ト放送を行い、その後、およそ月一回程度のペースで放送を実施し、1月までに計 9 回の放送を実施した。本年度は「テツガクシャの御用聞き」という番組名で、おもに哲学を学ぶ大学院生をゲストに招き、哲学対話の手法で話を聞く番組を放送した。固定的な視聴者層も獲得することでき、確かな手応えがあった。こちらはさらに発展させてかたちでの第二期放送を 2023 年度に予定している。

以上のように、2022 年度は、研究者、学生、企業、NPO、当事者、一般の方など多様なアクターを巻き込み、多様な様式による多数の行事が開催された実り豊かな年となった。今後は、社会との実質的な連携を本格的に深めていきたい。

Radio PiXOL「テツガクシャの御用聞き」放送画像



## ◎MeWプロジェクト：生理用品を通した月経の諸課題の実証研究
## 担当教員：杉田 映理

**ウェブサイト：htt@s://mewproject-osaka-u.jp/**
**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／参加者 200 人**
**国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件（学会等を含めれば 3 件）約 200 人**

**1. 大阪大学内に設置のディスペンサーの O&M 活動**

1-1　人間科学研究科棟の生理用品補充とモニタリング
- 女子学生 5 名により、ほぼ 2 週に 1 回、各ディスペンサーの使用状況のモニタリングと生理用品の補充を実施
- ディスペンサー内の生理用品の種類に関するポスター作成

1-2　全学のサポート
- 全学用のポスターづくり
- 全学用のアンケートの作成
- D&I 課との情報共有、意見交換

**2. 大阪府立高校での調査**

2-1　大阪府教育庁と協働でパイロット校 9 校に MeW ディスペンサーを導入する実証研究を実施。MeW ディスペンサーを 9 校で 86 台設置した。

2-2　ベースライン調査として生徒へのオンライン質問票調査を実施

2-3　ディスペンサー利用者へのオンライン質問票調査

2-3　ディスペンサー設置約 1 ヶ月後に、教員への半構造化インタビュー、生徒へのフォーカス・グループ・インタビュー（FGDs）を実施。

2-4　エンドライン調査を行い、ディスペンサー設置前後への変化を調査した。

2-5　各校への報告書をまとめ、各校へ送付した。本調査では、延べ 880 名以上の高校生から協力を得た。

**3. 月経に関する研究会の開催**

3-1　月経研究会キックオフイベント『LOOKING FOR THAT―アレを探して―』上映会・ディスカッションの開催。本研究会は、人間科学研究科教育改革推進室 大学院学生研究集会開催支援金を受けて実施した。（26 名参加）

3-2　第 2 回月経研究会では、国際的な月経対処の動向について英語論文（Sommer 2022）を読み議論した。（9 名参加）

**4. アウトリーチ活動（イベント）**

4-1　広報用のグッズ制作
チラシ、ステッカー、Tシャツを作成

4-2「つながろう！SDGs アドベンチャー！」大阪大学共創 day@Expo city（2022.6.11）出展
参加者の方に MeW ディスペンサーの組み立て体験、多種多様な生理用品に見て触れてもらうという内容で実施した。

4-3　Road to 2025 大阪万博 1000 日前イベント（2022.7.24）に出展
MeW ディスペンサーの組み立て体験と多種多様な生理用品に見て触れてもらう内容で実施。Expo City のイベントと比較して幅広い世代へのアプローチをした。ユネスコスクールの 2 校の中高生 11 名が運営スタッフとして参加《高大連携》

4-4　フェムテックジャパン/フェムケアジャパン 2022（2022.8.26）に出展
MeW ディスペンサーの展示と「トイレ内の生理用品がもたらすウェルビーイング～ MeW ディスペンサーを設置してみて」という内容でセミナーに登壇。

4-5　人間科学部 50 周年記念事業（2022.12.3-4）における未来共創センター展示室への出展。

**5. アウトリーチ活動（学外の講演会・ワークショップ等）**

5-1　自治体・市民団体等における講演
①箕面市立萱野中央人権文化センター・らいとぴあ 21（院生による実施）、②尼崎市女性センター・トレピエ、③枚方市男女協働参画室、④長岡京市 男女協働参画センター、⑤伊丹市立 男女協働参画センター、⑥大阪 YWCA（院生による実施）、⑦オーストラリア Share the Dignity（Global Period Poverty Forum）

5-2　大学における一般向けの講演
①大阪大学 ダイバーシティー＆インクルージョンセミナー、②東洋大学国際共生社会研究センター（院生との共同発表）

**6. MeWディスペンサーの普及活動《産学連携》**

- MeW ディスペンサーの販売に向けたタマパック（株）との連携、体制づくり
- MeW ディスペンサーの組立てマニュアルの作成・改良
- MeW ディスペンサーの組立て動画の作成・改良
- MeW ディスペンサーの改良
- タマパック（株）ニュースレターへの掲載
- 2023 年 3 月までに、31 組織に合計約 1700 台のディスペンサー導入

**7. メディアを通じた発信**

- 日本経済新聞 2022/4/25「生理用品や鎮痛剤、負担額は？」
- 日本経済新聞社（Web版）2022/4/30「生理用品って高いの？ 月 400 ～ 3000 円と幅、製品も多様」
- NHK ほっと関西（TV） 2022/5/12「生理用品を社会インフラに」
- 共同通信社 KYODO NEWS（Web）2022/6/20 Japanese scholar develops disaster-friendly

sanitary goods dispenser

- 神戸新聞（新聞）2022/6/20「生理用品提供箱をトイレ個室に設置 阪大開発、災害時利用も」
- 産経新聞（新聞）2022/6/20「生理用品提供箱をトイレ個室に設置 阪大開発、災害時利用も」
- Japan Times (Web) 2022/6/23 Japanese scholar develops disaster-friendly dispenser for sanitary goods
- GPlus Media Japan Today (Web) 2022/6/25 Japanese scholar develops disaster-friendly sanitary goods dispenser
- Mainichi Newspapers (Web) 2022/7/2 Japanese scholar develops convenient cardboard sanitary goods dispenser
- 日本経済新聞社（新聞+Web）2023/1/3「「生理の貧困」広がる公助 支援自治体 4 割」
- ネットラジオ FM gig Bi-You-Do （Web ラジオ）2023/1/11, 25）（大学院生が出演）
- 産経新聞社 x メトロポリターナ「Fem Care Project」（Twitterライブ）2023/3/8「社会課題解決型フェムテックの可能性」
- NHK 関西 WEB NEWS （Web） 2023/3/29 日「サニタリーボックス 男性用トイレにも設置の動き」
- NHK ほっと関西（TV）2023/3/29「サニタリーボックス 男性用トレイに設置の動き」

**8. 学会発表等**

（詳細はリサーチマップをご参照下さい。）

**9. HP等を通じた情報発信**

HP htt@s://mewproject-osaka-u.jp/

インスタグラムおよびツイッター

@mewproject_ou

## ◎地域の食とプラネタリーヘルス

**ウェブサイト：https://localfoodlab-ph.org/**

**社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：5 件／参加者：約 40 人**

**（共創フィールドワーク、ワークショップ含む）**

**国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件／30 人**

本プロジェクトは、地域に根ざした食の探究を通じて、人と環境の双方の「健康」を目指す「プラネタリーヘルス」の実践にむけた学びと発信を行うことを目的に、2022 年度より活動を開始した。「地域の食」を探求するうえで、調査地としたのは瀬戸内地域である。瀬戸内地域は、その自然豊かな景観をもつ一方、高度経済成長期の工場誘致の加速によって工業地帯周辺で環境汚染が深刻化した歴史もあり、環境保全の観点から、日本で初めての国立公園に指定された地域でもある。そして、近年では芸術祭などのイベントも取り入れながら、観光による地域創生が活発になされている。

今年度は瀬戸内地域の 5 か所への共創フィールドワークを実施した。共創フィールドワークは、地域の人々（本プロジェクトでは、食に関わる団体や市民）とともに探求し、学びあう形で行われた。

活動報告を、ジャーナル『未来共創』第 10 号にて発表した。本稿は、異なる学部・研究科に所属する学生らがともに研究会等で議論を重ねながら執筆したものである（木村他 2023）。また、2022 年

10 月 25 日に行われた国際会議「瀬戸内未来会議」（本プロジェクトの共同研究団体である一般社団法人瀬戸内RE・SORT の主催）に参加し、学生や地域の人々と共に実施したフィールドワークについて紹介した。モナコ公国アルベール財団からの出席者や瀬戸内国際芸術祭に関わる建築家、および、岡山・香川の企業や自治体から計 30 人が参加し意見を交わした。

■参加学生の所属

人間科学部（６名）、医学部（１名）外国語学部（１名）、工学研究科（１名）、理学研究科（１名）

■他大学・研究機関

・石床　　渉（せとうち観光専門職短期大学・准教授）
・石本 恭子（川崎医療福祉大学健康体育学科・准教授）
・森　　渚（国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所・栄養疫学研究室室長）

■協力団体

・岡山県玉野市観光協会
・一般社団法人瀬戸内 RE・SORT
・一般社団法人全日本伝統文化後継者育成支援協会
・サイレント粟島

■国際会議

瀬戸内未来会議
日　時：2022 年 10 月 25 日 11:00～16:00
場　所：杜の街グレース（岡山市）
参加者：アルベール財団（モナコ公国）および岡山・香川の企業や自治体から計 30 人

■アウトプット

・ジャーナルにおける報告
木村友美、斎藤優久乃、伊東実穂、山道萌子、VOLUNTAD Raffaello Riley、高松真夕（2023）「『地域の食』を探求する―瀬戸内食のフィールドワークから」、未来共創、10 号（印刷中）
・アンケート調査とその結果の公開
協力団体とともに、「瀬戸内食」に関して、116 の自治体の観光関連団体を対象にアンケート調査を実施した。その結果をウエブサイトにて公開した。
＊瀬戸内食研究会 https://localfoodlab-ph.org/?page_id=1049

# 4　研究事業

## ◆4. 1　研究事業

### 未来共創センター「テーマ研究会」

未来共創センターでは、毎年テーマを決めて、そのテーマに関心のある教員や学生を募集して研究会を実施しています。2022 年度は「人口減少」をテーマとしました。人間科学研究科の多様な研究および実践の事例をもちよりながら、人口減少への共創的アプローチについて議論を深めました。
研究会での発表者と発表内容は、下記の通りです。

渥美 公秀・石塚 裕子（共生学系・未来共創センター）「尊厳のある縮退研究の紹介」
川端　亮（教育学系）「「緒方らぼ」の活動について」
吉川　徹（社会学系）「地方における人材共創プロジェクト」
オーバーピッヒラー（社会学系・博士課程）「日本におけるコンパクトシティ―西脇市を事例に―」
織田 和明（未来共創センター）「人口減少への共創的アプローチへむけて：
人間科学的なアプローチを求めて」
木村 友美（未来共創センター）「人口減少社会における高齢者ケア」

本研究会の成果として、ジャーナル『未来共創』の特集「人口減少への共創的アプローチ」にて発行しました。

本特集は現在地方で研究・実践に取り組んでいる人科の皆様の研究を結集し、「人口減少への共創的アプローチ」を世に示すものとなっています。執筆者の一人である川端先生からは地域おこし・地域（地方）創生に関する事例が紹介され、地域創生と研究・教育に関して議論がおこりました。特に、実践的研究（アクションリサーチ）としての、外からのアプローチと、地域の内にあるニーズをいかに重ね合わせるかという課題には、多様な事例からの意見が交わされました。また、「村を閉じる」という考えや働きかけの重要性について、渥美先生・石塚先生のご研究から提示されました。さらに、より俯瞰的なモデルとして、吉川先生は自治体の人口減少を生態系モデルとして説明を試みておられます。詳しくは、ジャーナル『未来共創』10 号の特集ページをご覧ください。（ジャーナル『未来共創』については、次頁で紹介します。）

## ◆4. 2　ジャーナル『未来共創』の発刊

2022 年度はジャーナル『未来共創』第 10 号を発刊しました。

ジャーナル『未来共創』第 10 号には論文 3 本、特集（対談 1 本と論文 3 本）、フォーラム（論考 1 本とコメント 2 本とそれぞれへの応答 2 本）、研究ノート 1 本、報告 4 本、書評 1 本が掲載されています。特集「人口減少への共創的アプローチ」には災害復興、街づくり、社会学の分野から興味深い論文をご寄稿いただいたほか、様々な分野の研究者に対談へご参加いただきました。

**ジャーナル『未来共創』第10号**
**目　　次**


発刊にあたって …… 澤村信英

≪論文≫
東日本大震災被災地における若者のライフコース
　一条件困難地域で生活する理由とコミュニティの復興
　…… 鈴木　勇・山本晃輔・岡邑　衛・榎井　縁・志水宏吉・高原耕平・宮前良平

ケニアのキベラスラムにおける無資格教員と低学費私立学校の関係
　一教員の生活戦略に着目して一 …… 長野優希

４つの共生論：共生を「ともいき」「シンバイオーシス」「エコシステム」「インクルージョン」
　の４つの視点から整理する …… 早川昌志・早川卓志

≪特集　人口減少における共創的アプローチ≫
特集にあたって・座談会 …… 織田和明
地方における人口社会減の「生態系」 一島根県の困難 …… 吉川　徹
尊厳ある縮退に関する理論的準備と展望 …… 渥美公秀・石塚裕子
大学の地域とのかかわり
　－がいなんよ大学 in のむらと復興支援酒「緒方洪庵」の取り組み …… 川端　亮

≪フォーラム　公教育における排除と包摂≫
公教育における外国人生徒の排除と包摂―5つの高校の比較調査から―
　…… 聶蕙菁・山脇　佳・榎井　縁・王一瓊・大川ヘナン・山本晃輔・石川朝子
コメント：高校における外国人生徒をめぐる文化保障の課題 …… 小川未空
コメント：フォーラム「教育における排除と包摂」によせて …… 小川未来

≪研究ノート≫
「自然を改造する」思想と自然・人間の共生
　一熊本県相良村のダム建設反対派の意見を中心に
　…… 岩本真由子・楊凌煙・大川ヘナン・佐々木美和・王一瓊

≪報告≫
コミュニティ・ラーニング2022報告 …… 石塚裕子・渥美公秀
「ヤングケアラー ～気づいて、つなぐには～」を開催して
　…… 岡部美香・大崎弘司・桧谷真美・野田満由美・大槻亮志
「地域の食」を探求する一瀬戸内食のフィールドワークから
　…… 木村友美・斎藤優久乃・伊東実穂・山道萌子・
　VOLUNTAD Raffaello Riley・高松真夕

≪書評≫
宮野真生子『言葉に出会う現在』初版、ナカニシヤ出版 …… 織田和明
編集後記 …… 織田和明

# 5　教育事業

## ◆5. 1　未来共創センター担当授業

未来共創センターでは、下記の授業を担当しています。

### （1）フィールド科目

【学部】未来共創フィールド実習Ⅰ　春～夏学期
【学部】未来共創フィールド実習Ⅱ　秋～冬学期
【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅠ　春～夏学期
【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅡ　秋～冬学期

2022年度は、「未来共創フィールド実習Ⅰ」の一環として、岡山県倉敷市真備町おける防災計画に関わるフィールドワークと、香川県の粟島での食のフィールドワークを実施しました。

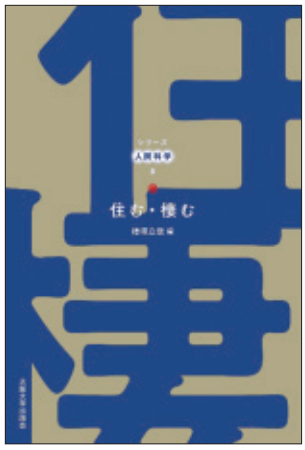
### （2）実践型学修活動

【学部】人間科学学際実習Ⅰ　春～夏学期
【学部】人間科学学際実習Ⅱ　秋～冬学期
【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅰ　春～夏学期
【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅱ　秋～冬学期
【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅰ　春～夏学期
【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅱ　秋～冬学期

### （3）人間科学学際研究特講

人間科学研究科の学際研究特講において、6 コマ分の授業を担当しています。2022 年度は、学系をこえたグループにおいて、「大阪万博でどのような共創プログラムができるか？」というお題をもとにディスカッションし、グループでのアイデアがまとめられました。

## ◆5．2　シリーズ人間科学の発刊




人間科学研究科附属未来共創センターが中心となり、人間科学にまつわるテーマを多分野の教員で共に執筆した書籍が「シリーズ人間科学」です。2017 年 3 月に第 1 巻『食べる』を、2018 年には第 2 巻『助ける』、第 3 巻『感じる』を、大阪大学出版会から刊行しました。「シリーズ人間科学」は人間科学部設立当時からある「人間科学とは何ですか？」という疑問への、現時点における私たちからの回答の一つです。2022 年度は、第 8 巻『住む・棲む』を刊行しました。内容は下記のとおりです。

**シリーズ人間科学 8**
**「住む・棲む」**
**檜垣 立哉 編集／三浦 麻子，山森 裕毅，斉藤 弥生，山口 宰，野坂 祐子，髙谷 幸，福岡 まどか，辻 大介，森田 敦郎 著**

**◎内容紹介**

「住む」と「棲む」の二重性を生きる――。

この世に人間としてあることは、必ず環境との関連のなかで、ある場所に「住む／棲む」ことを前提としている。それは身体をもつ生物的な存在である人間が生存し続けるための必要条件であるだけでなく、環境や場所にもとづく文化・家族形態を表し、そして、科学技術の進化を伴う時代をも表している。建築や空間における「住む」だけでなく、環境や土地、人間関係の結束点としての「棲む」。「住む／棲む」ことなしに人間が生を送ることはできない。

本書では、人間科学にかかわるさまざまな学問から、「住む／棲む」に切り込む。まずは近代的建築様式と「住む」の相関性、「建築」としての住居にこだわらない可能性を論じるほか、認知症高齢者の暮らしと住まいを考える。さらに、さまざまな場所で他者とともに生きる人間社会の関係性としての「棲む」、「棲息する」、「棲みつく」といった事象を検討し、家庭内での暴力と棲み処としての「イエ」、移民の事例から「住まうこと」の意味、アーティストにとって生活・上演活動・儀礼がリンクする場としての住居を考察する。

一方、インターネット空間あるいは仮想世界も「住まう」場所となり、学校や職場以上の居場所として存在意義を持ちつつある。ネットに住まうことと現実との関係性を改めて問い直す試みも可能であろう。さらに視点を変えれば、人間にとどまらない生物全般の活動による産物として地球環境を見直すことで、地球に棲まうこと、自然とはなにかを考える。

住居・建築・テクノロジー論にとどまらず、建物に「住む」ことと、場所や人間関係や環境において「棲む」ことの交点を掘り下げる。

**◎目次**

**第 1 部　住む・棲むこととは何か**
第 1 章　住む／棲むことの思想と未来 ―ル・コルビュジエを巡って
第 2 章　「住む／棲む」ことの社会心理学
第 3 章　ホームレス考 ―〈家がない〉ことの諸相について
**第 2 部　住む・棲むことの現場より**
第 4 章　認知症の人と「共同居住」の人間科学
第 5 章　家（イエ）に棲む暴力 ―家族間の暴力はなぜ起こるのか
第 6 章　帰属はいかに可能か―移民の実践から考える
第 7 章　「住む」と「演じる」 ―アート活動と「住む」こととの関係を考える

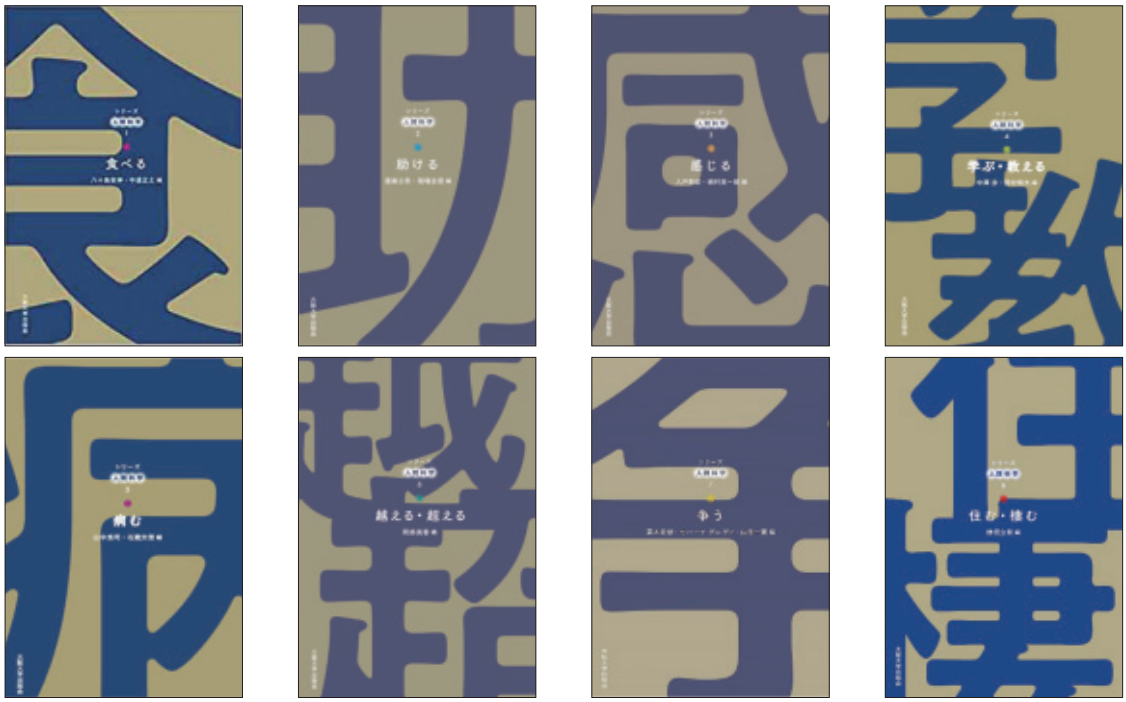
**第３部　住む・棲むことの未来へ**

第８章　ネット空間に住まうことと社会・人間関係の変容

第９章　人新世に棲む

～シリーズ人間科学これまでの出版～

・2017 年 3 月第 1 巻『食べる』八十島安伸，中道正之 編著
・2018 年 3 月第 2 巻『助ける』渥美 公秀，稲場 圭信 編
・2019 年 3 月第 3 巻『感じる』入戸野 宏，綿村 英一郎 編
・2020年 3 月第 4 巻『学ぶ・教える』中澤 渉，野村 晴夫 編
・2020年 3 月第 5 巻『病む』山中 浩司，石蔵 文信 編
・2021 年 3 月第 6 巻『越える・超える』岡部美香 編著
・2022年 3 月第 7 巻『争う』栗本英世，モハーチ・ゲルゲイ，山田一憲 編集／
・2022年12月第 8 巻『住む・棲む』檜垣 立哉 編集




## ◆5．3 『私の一冊』の発行

人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の一冊』を作成し、学生に配布しました。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表しました。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなりました。

## 6　その他の活動

| 日付 | 時間 | タイトル | 主催者／共催者 | 担当教員 | 場所 |
|---|---|---|---|---|---|
| 2022 年<br>4 月 23 日 | 14:00～<br>17:00 | 生き方死に方を考える社会フォーラム「人生最終章-医師から見た死に方について」 | 生き方死に方を考える社会フォーラム<br>人間科学研究科附属未来共創センター、大阪大学医療人文学研究会 | 山中浩司、<br>石蔵文信 | Zoom |
| 2022 年<br>5 月 19 日 | 15:00～<br>16:30 | 発達科学セミナー<br>How children learn to tell lies: Implications for affective artificial intelligence | University of Toronto | Dr. Kang Lee | ラーニングコモンズ |
| 2022 年<br>6 月 16 日 | 13:10～<br>15:10 | 味覚や食の好き嫌いを科学してみる | 人間科学研究科 | 八十島安伸 | 兵庫県立<br>小野高等学校 |
| 2022 年<br>6 月 18 日 | 14:00～<br>17:00 | 生き方死に方を考える社会フォーラム「在宅医療から終末期を考える－それぞれの生き方・逝き方」 | 生き方死に方を考える社会フォーラム<br>人間科学研究科附属未来共創センター、大阪大学医療人文学研究会 | 山中浩司、<br>石蔵文信 | Zoom |
| 2022 年<br>6 月 28 日 | 15:00～<br>17:00 | ヤングケアラー<br>～気づいて、つなぐには～ | 大阪大学人間科学研究科<br>大阪大学グローバル日本学教育研究拠点 | 岡部美香、<br>村上靖彦 | Zoom |
| 2022 年<br>8 月 26 日 | 14:00～<br>15:30 | コミュニティ・ラーニング 2022　現地報告会 | 人間科学研究科附属未来共創センター（未来共生プログラム）<br>大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（SSI） | 渥美公秀、<br>石塚裕子、<br>徳永恵美香、<br>今井貴代子 | 岩手県九戸郡野田村、<br>ラーニングコモンズ |
| 2022 年<br>9 月 10 日 | 14:00～<br>17:00 | 生き方死に方を考える社会フォーラム<br>「コロナ時代に考える日本人の意志決定のあり方」 | 生き方死に方を考える社会フォーラム<br>人間科学研究科附属未来共創センター、大阪大学医療人文学研究会 | 山中浩司、<br>石蔵文信 | Zoom |
| 2022 年<br>11月3日～5日 | | ふくしまスタディツアー 2022 | 人間科学研究科附属未来共創センター（未来共生プログラム）<br>大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（SSI） | 石塚裕子、<br>渥美公秀、<br>今井貴代子 | 福島県浜通り |
| 2022 年<br>12 月 9 日 | 18:00～<br>19:30 | ふくしまスタディツアー報告会 2022 | 人間科学研究科附属未来共創センター（未来共生プログラム）<br>大阪大学社会ソリューションイニシアティブ（SSI） | 石塚裕子、<br>渥美公秀、<br>今井貴代子 | インターナショナルカフェ＋Zoom |
| 2023 年<br>3 月 18 日 | 14:00～<br>16:30 | 映画『ワタシタチハニンゲンダ！』上映会＆高賛有監督トーク | 人間科学研究科附属未来共創センター未来共生プログラム | 榎井　縁 | キャノピホール |

# Ⅲ 未来共創センターの活動に関わった皆さんの声

## 「わかる」と「わからない」のはざまで

知れば知るほどわからなくなるという言葉は頻繁に耳にします。研究とは自分がいかに「わかっていない」かを知ることであるかのような気さえもしてきます。しかし研究者たるもの、研究に励んで「わかる」ようになり、「わかっていること」を広く世界に向けて発表しなければなりません。「わからない」の山の中で見つけてきた一握りの「わかっていること」を発表する場所としてジャーナル『未来共創』を選んでいただいた皆様には編集委員会の事務局を務めた者として、感謝申し上げます。

共創とはそれぞれがささやかな「わかる」を持ち寄り、掛け合わせることでしょう。単純な「わかる」と「わかる」の組み合わせではなく、「わかる」と「わかる」の創造的な総合によって大きく膨らませていきます。その支えとなるのは自分の「わからない」ことを知っている相手への信頼と尊敬、そして新しいものへの希望です。これはとても難しいことだと思うのですが、少しでも実現できるように日々励んでいきたいです。

**織田 和明**
附属未来共創センター
特任研究員
（現：大阪大学大学院
人間科学研究科助教）

## 未来共創センターとのつながりは未来へのスタートライン

平成 30 年（2018 年）6 月 18 日（月）。

吹田市は震度 5 強の揺れを観測しました。大阪府北部地震（以下、北部地震）です。吹田市社会福祉協議会（以下、吹田市社協）が開設した災害ボランティアセンターには、大阪大学人間科学研究科（以下、人科）の渥美先生、稲場先生、学生、日本災害救援ボランティアネットワーク（以下、NVNAD）の寺本氏に連日支援頂きました。その後も住民の生活課題を感じた人科学生有志が「すいすい吹田」を結成。地域のサロン等で住民と交流するなど、つながりを深めた 1 年でした。

令和 2 年 2 月。新型コロナウイルス感染拡大防止のため地域のサロン活動等は開催自粛。

「コロナ＝災害」と捉え災害ボランティアラボの活動として、すいすい吹田、NVNAD、同地区福祉委員会、吹田市社協による「よりそい隊活動」を開始。すいすい吹田が「よりそい隊通信」を毎月発行し、福祉委員会が一人暮らし高齢者の見守り訪問時に手渡し（投函）しました。「出会えない中の心の交流」は、コロナ禍のつながり作りを象徴した活動として厚生労働白書等で紹介されました。

これらの活動を通して令和 3 年に人科と吹田市社協は OOS 協定を締結。これまで災害ボランティアラボとの連携がメインでしたが、OOS 協定締結後は各締結団体とも連携した地域福祉活動等で関わる機会が増えてきました。また、学生と連携する機会も増え、地域住民（特に高齢者）からは「孫のような存在」と喜ばれています。

未来共創センターとのつながりは、よりそい隊活動、地域防災活動、普段の地域福祉活動等で連携を深めるなど、地域福祉活動に欠かせない存在となっています。

**新宅 太郎**
吹田市社会福祉協議会
地域福祉課長

## 人科50周年記念学生プロジェクト ―人と繋がりを感じて―

2022 年 10 月、私たちの企画：参加型アート「結ぶ、繋ぐ、結いなおす」が始まりました。過ぎていく日々に焦りながらも、2023 年 2 月には、「人」の文字を模した竹のオブジェを制作するイベントを行い、そして最大の目的である、オブジェに毛糸を結ぶ"参加型アートのイベントを、7月に迎えることができ、大変喜ばしく思っております。

本企画は、「人との繋がり」が主題であり、同じ時間を共にする仲間を結び、過去に出会った人との縁を結び直す空間を提供することを目指してきましたが、企画自体も繋がりに助けられてきました。

費用面で課題を抱えてのスタートでしたので、利益度外視で、快く協力してくださった講師の方や、取り次いでくださった県庁の方がいなければ、ここまでこれなかったと思います。また、未来共創センターの石塚先生、川渕様、杉本先生からは、実施計画および原稿の推敲や他部署との交渉、予算執行のご助言等をいただき、私自身も非常に多くのことを学ぶことができました。その他にも、同窓会事務局や他部署の教職員の方、外部の皆様、所属研究室の卒業生の方からも、温かいお言葉や特別なご支援をいただきました。こうした人々との出会いによって、企画が輝きを増していく様をみることができたことは、私自身、得難い経験となりました。

これまでにご尽力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。制作した作品が、これからの人科生を繋ぐシンボルとなることを切に願っております。

**田邊　匠**
大阪大学大学院
人間科学研究科
博士後期課程

発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2
2023 年 7 月 31 日

編集・校正協力
特任事務職員　川渕 千恵子

制作・印刷
株式会社一心社

大阪大学大学院人間科学研究科
附属 未来共創センター